

第六回古田武彦古代史セミナー 講演録

日時 2009年11月7日、8日
場所 八王子大学セミナーハウス
演題 日本古代史新考 自由自在(2)
文責 平松健

おことわり

開会の挨拶、事務連絡等は省略させていただいた。
内容については、その時点で古田先生がお話になったとおりのことを再録することに努めた。ただし、明らかに言い間違いのような個所は、先生に確認の上訂正した。なお、この記録は、ご発表の時点での先生のお考えであることを付言したい。
また質問等につき、本文に関連してされたものも一切本文の後に掲載し、また、その順序も、関連事項になるべくまとめるように配置したことをご了承願いたい。

倭人伝の国名と職名 倭人伝を読む原則

最初のテーマは三国志の魏志倭人伝に三十国の国名です。職名についても長官とか副官とかが出てきますが、どちらもよく解らなかつた。そのため『「邪馬台国」はなかつた』でも、邪馬壹国問題は論じましたが、それ以外の三十国問題、官職問題は立ち入っていません。

他の人は、三十カ国を大体自分流に読んでいます。私から見れば、自分が邪馬台国と見なす場所を中心にして後の辻褃合わせとか、修正をしたりして無理矢理合わせているように思えます。私にはそういうやり方は駄目です。

一定の法則というルールによって決めて行く。それが間違っていればルールが間違っている。そういうやり方で今回ほぼ読めたと思っています。

誰が表記したか

私は『「邪馬台国」はなかつた』を書いたときには倭人伝の中の国名とか職名とかは中国側がこれを表記したと考えていました。ところが、同本を世に出したとき、それに対してクレームが来ました。当時佐賀県の地家裁判所の所長をしておられました倉田卓次さんから、「古田説に一つだけ反対の所がある。それは倭人伝の国名とか職名は中国側が表記したと書いているが、それは間違いであると思われる。その例として、壱岐のことを一大国と言っている。中国側はあんな小さな島を一つの大きな国と書くはずがない」ということです。

私はすぐに、おっしゃる通りですが、自分は現在代案がありませんのでこれから考えますというご返事をしたのを覚えております。それ以後私にとっては倉田命題として引きずってきました。

一大国

これを裏付ける発見はまもなくありました。一大国は古事記のまたの名で天の一つ柱

(天之比登都柱)として呼ばれ、八大国の一つとして重要視されていて、他の七国名と比べて一本の柱の名前を国名とするという一見特異なものになっています。これは結論から言うとアマは海士、海士郡、海士族のアマです。一つのヒは太陽のヒ、トは神殿の戸口、ツは港の津です。意味は「太陽の神殿の港」。ハシラのハは植物で広い場所がハ、シは人に生き死にする場所。ラは接尾語のラ。全体で「天族にとって太陽の神殿のある港を前に持った広い人の生き死にする場所」という意味になる。これは有名な原の辻です。

原の辻にはいわゆる弥生のもものが集中して出てきます。あそこはハシ、人に生き死にする広い場所です。小さい道を通るとすぐ港に出るわけです。その港が太陽の神殿のある港です。原の辻のことを日本語で表現しているわけです。

要するに日本語であってそれを漢字に当て直したわけです。ヒトツというのは日本語で数字のヒトツ、それを漢字の一に当てたわけです。ハシは広い所ですのでこれを大とした。それで一大国とした。(東京古田会ニュース117号〈2007年11月〉参照)。一大国というのは中国側ではなく倭人側が漢字表記を工夫して表記した名前です。

對海国

もう一つ對海国ですが、これは簡単なようで、そうでないのは、海に対する国というのであったら、日本中のほとんどの国が對海国です。対馬だけを對海国という理由はないわけです。結論を言うと、対島では天之狭手依比売(アマノサデヨリヒメ)という女神を各神社で漁師たちは祭っています。そのサデとは熊手のことで、島根県でも広島県でもサデと言います。海の貝などを集めるときに使い、熊手で集めるのを「サデる」と言います。漁師にとって非常に重要な道具です。

これが成立するのは縄文時代弥生時代にかかっていると思いますが、天族にとって重要な道具はサデであって、ヨリというのは「よりしろ」、つまりサデをよりしろとしておられる女神というのが、「あまのさでよりひめ」の本来の名前です。

一方對海国の對というのは人間が神様に対面するということです。今では人間同士でも対面・対人などと使いますが、大漢和では人間が神様の面前にあるというのが對という字の本来の意味です。(文責者注 大漢和では對について①こらえる②あたる③むかうとあり、この場合對=嚮とある。嚮の例では戒六神輿嚮服とある)。

次に海ですが、我々は塩辛い海だと思っていますが、本来海の神様のことを海という(文責者注 大漢和 海 ①海②・・・⑩水の神)。

もともとの意味を忘れて我々は応用編ばかりやっている。對海国というのは海の神に対して対面している国という意味になる。これは何かというと漁師が年に何回かお祭りをして、天之狭手依比売に、神のお陰で上手く来たことに感謝し、神の作ったルールを守らなくて事故を起こしたことを詫げる、それがお祭りです。対馬は、神社がたくさんあり、そういうお祭りをする国だから對海国なのです。海が周りにあれば全部對海国というような薄っぺらな意味ではなかった。對海国の名がつけられるのは勿論中国側ではなく、倭人側が文字の使用を理解して使っているということになります。

任那

倭人側が表記したもので典型的なものは任那です。通常ではミマナなどと読めません。

任という字は任務の任ですが、ここで人偏を取って考える。金印ですと倭人の倭に人偏がありません（委）。倭人伝でも釜山から唐津に来るまで三回海を渡っています。一回目の渡るはさんずいがありません（度）。二回目三回目はさんずいがある（渡）。結論から言うとさんずいのあるなしに関係なく、ともに渡るという意味です。倭も人偏のあるなしともに倭です。任那と書いている任の人偏を取ってみると俄然意味がはっきりしたわけです。

人偏を取ると壬は北方という意味しかない。漢字では一つ字でいろんな意味があるのが普通ですが壬には意味が一つしかない。那はナ of 津 of 那で大地という意味です。当然日本語です。北方の領地という意味で任那と言っている。当然倭人がその意味を与えたのです。中国人や韓国人が釜山近辺を北方の領土という意味の字面を使うことはあり得ない。だからこれは倭人側が書いた字ということになります。

（古田会ニュース118号と同趣旨の部分を省略。要旨は「裸国」「黒齒国」も日本語である。当然それは弥生以前だから縄文時代の日本語であることになる。）

このように倭人がかなり彼らの頭をつかって、漢字表記をやっているということが解った。さらに高句麗好太王碑に任那が出てくることは高句麗の金石文に日本語が刻まれているという問題が出てきますが、時間の関係で割愛します。

都市牛利

（古田会ニュース124号と同趣旨の部分を省略）

都市が姓で牛利が名だということになった。佐賀県鷹島が都市さんの本家本元の場所だということがはっきりした。要するに松浦水軍のボスの家柄であり、お墓がある場所は黒津という地名であります。黒津のクロは「神聖な」という意味です。ここを黒潮が流れている。司馬懿がやったのは、東方海上上陸作戦です。つまりピョンヤンの方へまっすぐ東に行って朝鮮半島に上陸しているわけです。

一方は洛陽の方から迂回して挟み撃ちにして公孫淵の首を取るのに成功しました。あれが一步遅れていたら逆になるのです。逆というのは、すでに、呉が公孫淵と連絡を取っていました。三国志に出てきます。呉が洛陽を南から攻め、そして公孫淵が北から攻めていたら魏が袋の鼠になるのです。その一步手前に海上渡航作戦をやったから魏が勝ったのです。だから呉にも勝って三国統一もできたのです。三国統一の決め手になったのが海上渡航作戦です。

渡航作戦をするに際して、魏は大陸国家で季節や時間で大きく潮流が変わる海洋のことは知らない。それを知っていたのは松浦水軍です。布を二匹持って行ったということだけではない。要するに海上の知識を松浦水軍はもたらした。魏はそれによって海上渡航作戦に成功した。

中国の天子の詔勅が長文で載っています。卑弥呼ないしその周辺にいる人たちは読めたということです。少なくとも中国側は倭人の漢文解読能力を知っていたということです。また卑弥呼の上表文は、漢文で書いた、天子に出す漢文ですから、ちゃんとした漢文だったろうと思われれます。

都市問題からそれが解ってきた訳です。難升米が渡来人だったとすれば（当会ニュース124号）、当然漢文が読めるし書けるわけです。

銅鏡にある漢字

博多湾岸の須玖岡本から、中国の絹が出てきたのは有名ですが、須玖岡本のすぐそばに弥生中期の鏡が出土して、それに漢字が書いてありました。それが実に下手な字で、それに富岡謙蔵先生が注目してこれは鏡史を考える上で重要だと書いてある。弥生時代に明らかに中国人以外が書いた下手な字が銅鏡に刻まれているのですから、あの時代に日本人が字を書いた紛れもない証拠です。

ところが京城大学の関係で、戦後解らなくなりました。樋口隆康さんや森浩一さんの意見では行方知らずになっているとのことでしたが、私は事前に連絡して一人でソウルに行ったわけですが、ちゃんと出てきました。綺麗に保存して、私の願った実物が出てきました。それは富岡謙蔵さんが言った通りで日本人が書いた漢字です。漢字には違いがないがあまりにも下手な漢字です。それが弥生時代の銅鏡に刻まれていることが非常に重要です。

博多湾に前漢鏡後漢鏡など沢山でています。あれを全部今の考古学界は中国鏡として扱っていますが、あれは怪しいわけです。今の話は下手に字を書いてある場合は日本製の証拠になったわけですが、何時までも下手とは限らない、練習すればうまくなる。そうするとほかの鏡も疑いたくなるわけです。明白なのは平原の大きな鏡は、あれは中国に無いですから、あれに書いてある字は倭人が書いた漢字に決まっています。

それを考え合わせると博多湾岸からでる鏡は、全部とは言えないが日本人が作ったものがかなりある、むしろ量的には倭人側が作ったものが多いと見なすべきと思います。

難さんの族譜

都市牛利の続きで、難という字は北方音ではダン、南方音ではナンとなります。ところが博多から北九州市にかけてはダンさんというのは結構いらっしゃる。あの団さんは明らかに中国名です。中国名を持ったまま日本に来てそれを使い続けているわけです。ナンさんというのは有明海沿いに沢山いらっしゃるそうです。二種類あって南（ナン）とそのまま読んでいる人と南（ミナミ）と読み替えている人とがある。

もう一つ、中国の周禮に出てくる難さんの家柄は鬼遣らい（追難＝悪気が付いているものを払う呪い）の職業であると書かれています。ところが太宰府の天満宮は鬼遣らいの神社です。一方では天満宮というのは「アマツミツ」です。天満というのは、先の任那のように日本側で考えた文字資料の一つで、本来海士族のアマとミツは御港。海士族の御港がアマツミツです。天満という字をあてて表記しているわけです。その天満宮の由来は鬼遣らいということになります。

難升米は、鬼遣らいを示す難家です。海士族と鬼遣らい、それが合体しているのが天満宮です。菅原道真なんていうのは極最近のことです。

具体的国名

このように考えると、「使訳通ずる所三十国」が次々と読めてきます。三十カ国のうち、最後から二番目に烏奴国（ウヌコク）があります。ヌはノと同じですから、岡山県の宇野に当たります。

その前の支惟国で、支については一つ大事なテーマがありますので、後から詳しく説明しますが、ここでは支はキと読んで、キイ国、和歌山の紀伊の国です。

次に巴利国（ハリコク）あり。これは尾張です。尾がついているだけで尾張の「ハリ」国です。

最後から五つ目に躬臣国というのがあります。躬という字は、自らという意味しかない。臣は臣下です。自ら臣下になった国という意味で、以前は出雲と誤って思いましたが、これは「クシ」国が正しいと思います。筑紫、つくしのクシ。ちくしのチは神様のチ、ツは港のツ、付け替えが違うだけで本体はクシです。クシ国が自ら臣下になったのは当然天孫降臨からです。猿田彦なんかがニニギノミコトを出迎えました。出迎えたのは嘘で、侵略・支配したことをそういう形で美しく言っただけです。

侵略する軍隊に付いて言えば、いわゆる一大国に関連して一大率があります。あれを文字通り読めば、一大国の軍隊と読むべきです。先入観を持たずに倭人伝を正確に読めば、一大国がまず出てきて、しばらくして、一大率が出てくるのですから、一大率は一大国の軍団の長官というしかないです。

天孫降臨とは要するに對馬・壱岐のアマテラスの海上軍団が、稲作の行われていた博多湾岸を侵略・支配したということで、天孫降臨という名前の支配・占領が行われたことに他なりません。猿田彦が出迎えたという名の下に、筑紫は、自ら臣下になったとして「クシ国」と言われたのです。これは出雲ではなくて筑紫です。

その前の邪馬国、これはヤマトです。神武は三世紀より前ですから、奈良にヤマトが無いはずはない。邪馬壹国の分国です。

その前の鬼奴（キヌ）国、キノ国ですね。岡山鬼ノ城のある所です。

その前の為吾（イゴ）国、為は伊豫のイで、コはヒコのコではないかと思えます。

その前の鬼国（キコク）これは福岡県に基山（キヤマ）があります。

順序がずれますが對蘇国、これは阿蘇山に対する国です。

姐奴国（ソノコク）これは阿蘇山近辺です。

蘇奴国（ソノコク）は阿蘇を取り巻く原野の国です。

華奴蘇奴国（カノソノコク）、ここだけ二階建てのような言葉になっています。蘇奴国が阿蘇を取り巻く原野でその上の華奴というのが今までよく解らなかつた。それが解けたのがこの問題を解いた第一関門です。すなわち華というのはファイア、燃える火。日本流に見ると同類に見える華。火の燃える原野、阿蘇山の火口のある国です。これが蘇奴国に属している。

今は行政区画で言う場合は広い所を言って次に狭い所を言いますが、早い段階では逆になっています。海上の民族にとっては自分が拠点としている場所、それを元にして全体の神話を表現する。そういう言い方の方が古いわけです。要するに狭い所を先に言って広い所を後で言う。その言い方で、火の燃える原野のある阿蘇の河口の原野、阿蘇山そのものを指しています。

それからその前の弥奴国（ミノコク）これは美濃の国です。岐阜県です。

斯馬国、これは糸島から解ります。

己百支国（イワキコク）というのは「いわら」というのが三雲の所にあります。

好古都国（コウコトコク）。これが国名読みの最大のポイントでした。これを私は出雲だと思えます。ここで好き古き都と言っています。つまり三世紀の卑弥呼の側からみて古き好き都ということです。好ましいとほめているわけです。そうするとこれは国譲りの出雲しかないと思われれます。躬臣国は「クシ国」で筑紫です。そうすると出雲はどこ

かということになると好古都国、好ましき古き都ということになります。これは意味で来ているわけですが、音も無関係ではありません。琴というと、我々は平安時代の琴を思い浮かべるのですが、古事記の中では、銅鐸を「こと」と呼んでいる。「ぬおと」でぬが銅鐸、「ぬおと」というのが古事記に出てきます。(文責者注＝岩波大系329頁では「ぬりて」と読ませている)。小銅鐸は楽器ですから、あれを「こと」と呼んでいる。出雲から銅鐸が沢山出ましたが、あれは音楽の宗教儀礼の道具です。ですから銅鐸のことがシンボルになっている国です。だからここで「古都」と言っているのはその銅鐸の音の方の「こと」それと古き都の古都とかけているのです。

神話の編年

そこで面白い問題は神話の編年ができることです。三世紀の倭人伝では出雲は好ましき古都として誉められていますが、神話では出雲を悪く言っています。結局アマテラスが姉で、素戔鳴尊は乱暴な弟ということになっている。アマテラスは筑紫の方の天孫降臨の淵源で、そしてスサノオが出雲の方の淵源。その関係は心の美しい姉と、乱暴者の弟の関係です。それは嘘で、時代的にはスサノオはアマテラスより五、六代前になります。姉・弟であるはずがない。出雲はアマテラスよりだいぶ前になりますがこの関係を壊して、乱暴な弟が偉い姉に従うべきだという関係に置き換えたのが神話の姿です。

三世紀の倭人伝では出雲を尊重して好ましき古き都で、それを我々は受け継いだという、つまり出雲肯定の立場で作られている。ということはあの神話は三世紀より後に作られたということになる。

一方天孫降臨の方は、天孫降臨という名前の侵略を行った。その侵略の結果がイキマで、イキマの統治している所が一大率で、小国はそれを怖れている。つまり天孫降臨は三世紀より前ということになる。

国名の時代

今まで紀伊や尾張の国名について、九世紀頃にできた和名抄に出ていると古いということになっていました。和名抄というのは天皇家中心の地名辞典です。

ところが今のように三世紀の中国側の同時代資料に尾張や美濃や紀伊が出てきているということは尾張や紀伊などは、三世紀にも尾張、紀伊と言われていたという証拠になります。

狗奴国（倭人伝）＝拘奴国（後漢書）

最後に狗奴国（コウノコク）の問題があります。倭人伝に、それが卑弥呼の国と敵対しているということが書いてある。国王とおぼしき人物の名前が出てくるが、長官、副官みたいなものも書いていない。非常に不思議な出方をしているわけです。

問題は狗奴国の位置です。以前合田さんから位置の質問をうけた時、「これはもしかしたら長里かも知れない。つまり倭人伝は位置が曖昧なままで明白な表記ではないけれど、後漢書の方は表記がある。女王国から東へ千里と書いてある。国名は後漢書では拘奴国、倭人伝では狗奴国になっている。発音は同じと思われる。ところが後漢書にあるということは後漢代の位置表示だが、後漢書を書いた范曄（398～448）は南朝劉宋の五世紀の人物だから。彼が千里と言った場合は長里で考えなければならない。況や彼が見

た資料は当然長里である。つまり短里の六倍ぐらいの長さになる。そうすると千里というのは九州の東岸部所ではなく、瀬戸内海を越えて大阪府茨木市、銅鐸の製造元である交野あたりになるのではないか。だから拘奴国（狗奴国）というのは銅鐸圏の国ではないか」というふうに答えたわけです。

その後私に取っては確定したテーマになってきています。もう一度言いますと倭人伝は短里である。しかし後漢や南朝の時は長里である。だから范曄が狗奴国を東へ千里と言った場合は長里の千里で、瀬戸内海を越えて近畿になって行くという論理です。

親魏倭王の意味

今回さらに後漢書をよく読んでみると、拘奴国がでていますが、拘奴国が倭国と争ったという記事はない。今まで何となく拘奴国というのは女王国と争ったということが頭にある。三国志と後漢書を混同して読んでいたわけですね。争っているのは倭人伝だけです。このことは、両者の対立は三世紀になって卑弥呼の時代になって出てきた新たな事件だということになるわけです。それは何故か。

倭人伝の場合は親魏倭王の国です。魏に服属している国は、逆にいうと反呉倭王の国で、呉に対立する国なのです。蜀はかなり遠い国ですから倭人と直接関係ないと思われそうですが、魏と呉は両方とも倭国の真ん前ですから、どちらと手を組むかで、えらい話になる。公孫淵などにも大きな影響がある。

親魏倭王ということは同時に反呉倭王となります。その証拠に吉野ヶ里や有明海に入ってくると彼らはなぜか博多湾岸を目指している。南の方でなく北を目指している。敵は北を目指すに決まったようにして吉野ヶ里が作られている。すなわち吉野ヶ里のもうすぐ北からは女王国です。女王国が博多湾岸になれば吉野ヶ里を持つ地理的理由がないわけです。

もう一つ不思議なのは、弥生時代の終わり近くになって埋め立てされている。その中に弥生の後半期から終わり近くの弥生土器が一緒になって出てくるわけです。土器が堀に埋められていたのです。

この理由は、吉野ヶ里は呉を敵として築かれた。西晋に統合されて呉が滅亡すると、呉のかつての地は西晋になっています。にもかかわらず堀を掘っていたままでは、今度は西晋に敵対することになってしまう。親魏倭王から親（西）晋倭王になったわけですから、当然軍事的要塞は埋めなくてはならないわけです。

要するに、倭人伝というのは親魏倭王の国の伝記ということになります。親呉倭王の国のことはほとんど書いていない。今の狗奴国というのは親呉倭王の国です。その地理的位置は解らないはずなのに書いていない。官職名、長官副官名はないはずなのに書いていない。我々は親魏倭王の国の立場ですという報告だけ書いてあるわけです。加うるに、張政という文政官が倭国に来て二十年も倭国に留まります。かつてNHKにおられた木佐さんが、「張政が最初出てきて壹与のときにまた出てくる。その間二十年経っている。二十年間倭国にいたわけで、その軍事報告を元に倭人伝は書かれているわけだから、古田が言ったように軍事報告書として理解しなくてはならない」という重要な指摘をされました。

今回、何故二十年もいたかということが解りました。要するに張政は親呉倭王の国と、特に狗奴国などと対決して倭国を守るために来ているわけです。二十年間いなければな

らなかったわけです（呉の滅亡は284年）。倭人伝はそういう二十年間を見た親呉倭王の国に対決する位置づけで書かれている。

生口

もう一つの重要な問題は、高木病院の加藤院長のお話で、「三十国が書かれてあるのは、倭国側が中国に書いた上奏文の中にあった国の名前ではないか。つまり倭国側が書いた表記だという立場に立って考えると、いろんな産物を持って行って、その産物を産出した国の名前を倭国側から書いてあったから、それを陳寿は書いたのではないか」と言われた。

問題は、上表文は卑弥呼の時一回だけです。壹与の時は上表文を持って行ったと書いていないのです。もう一つ産物は卑弥呼の時は、ある程度はあるがそんなに沢山ではない。第二回目はある程度はあるが三十もはないわけです。ただ壹与の所で、男女生口三十人を献上とあり、数が一致します。

従来の普通の解釈なら生口というのは捕虜になっています。捕虜と三十国とはあまりピント来ない。ところが結論を言いますと従来から生口の解釈を間違えていた。

諸橋大漢和で引くと二つ意味があって一つは捕虜と書いてある。もう一つは牛馬と書いてある。ところが捕虜の用例を見ると生口を捕獲すると書いてある。生口を捕虜と解釈すると、捕虜を捕獲ということになり、馬に乗って落馬するのたぐいで変な表現になります。そのため生口は捕虜という意味ではないと考えました。それは広島県に「いのくちじま」というのがあり、生口島と書いてある。「いのくち」というのは神より賜った神聖な神のいる場所で、捕虜の島というのではない。

結論から言うと「いきとしいけるもの」という意味である。牛馬も人間も生きているものは生口である。生口の意味を従来のあらゆる学者が間違えて使っていたわけです。

献上

もう一つ献上という言葉です。後漢書に「安帝の永初元年倭の国王帥升等生口百六十人を献じ」とあり、この生口も捕虜とすると何倍かの兵隊も必要で、百六十人も連れて行くのは大変です。問題はここで「献じ」とあることです。

そもそも、中国は歴史書を中華思想の立場で書いてある。周辺国は全部献上する方です、ご主人と家来の関係でないと国交を認めないという立場です。彼らはなんでも国交があったら、そういう上下関係に直して書いてある。それを上下関係の歴史事実と受け取るのではなく「献上」と書いてあるのは国交を結んだと理解するべきです。国交を結ぶとき生きた人間を百六十人連れて国王が行ったということです。

同様に解釈できることは、倭人伝の冒頭に「倭人（中略）。旧百余国。漢の時朝見する者有り」とあります。百余国が朝見したという記事は百六十人の場合と同様、百余国の地方代表が倭国の国王と一緒にいったと解釈するべきです。もう一度言うと生口を捕虜と考えることは間違い。朝見というのは中国のイデオロギー表現であるからそのまま取るのは間違い。要するに生口というのは生きた人間、生きとし生けるものという意味です。

官職名

官職名についてですが、邪馬壹国のところで官に伊支馬（イキマ）ありとあります。イキは壱岐対馬の壱岐で、占領軍の軍事中心である壱岐です。そのナンバーツーが弥馬升（ミマシ）です。ミマシのシはチクシのシで、ミは御という敬語のミでマは接頭語のマです。要するにチクシの国を支配しているのはミマシです。それで同じく弥馬獲支（ミマカキ）といい、カキのうち、カは神聖な水、キは城と要害、即ち神聖な水の要害、即ち太宰府の所の後の水城と言えます。水城というのは要するに水をためて博多湾岸にいた人々の飲料、軍事用を含めた水を補給するものです。だから博多に対して水をためる場所、それがこのミマシです。水城というのはそれが発展した七世紀段階の話です。水城の前段階もあったということです。

次が奴佳鞮（ヌカテイ）というのがありますが、これはヌカダというのが博多の吉武高木のすぐそばにあります。額田王の額田がこれではないかと言われたことがある額田です。テは手のひらのテです。ヌカテの力は水のこと。原野に多い水が手のように広がっている。今でも早良郡というのは、沼や湖が一杯あります。ですから吉武高木を守っているのが奴佳鞮、水城に発展するのが弥馬獲支、それで博多湾岸を支配しているのが弥馬升ということで、要所要所を押さえているのが第一、第二、第三、第四の要職です。しかもミマというのが第二、第三に出てきています。これは先ほどのミマナと同じです。朝鮮半島側と博多湾側にミマという王の御料地がある。そういう形で兩岸にまたがってあるわけです。そのミマナが好太王碑に出てくるわけです。

支の読み方

先ほどから支をキと読むと結論だけ言ってきましたが、その前に藤沢さんが詳しく調べておられますので一寸話して頂きます。

（藤沢徹氏）

漢字源で支を引いてみますと漢音、呉音ともシなんですけどキと言う例もあります。たとえば歌舞伎のキ、漢字では人偏に支を書きます。岐阜県のギはやまへんに支を書きます。中国語には四声があります。平声の時にシをキと呼んでいる例があるということで報告申しあげました。（文責者注 藤堂明保氏の漢和大字典では kieg t ʃ ie tsi tsi zhi となっている。上古音ではキに似た発音があったと思われる。）

只今、支にシとキの両音があるということ、一般的にはシ音だがキ音もあり得るということをお四声に関連してご説明頂いたわけです。

ところで私が三国志をやりだして間もない頃発見したと思ったことは、二十四史百衲本紹熙本の三国志の巻八です。魏志公孫瓚傳の第一行（文責者注 中華書局版三国志239頁）に「遼西令支人也」とあります。これはレイキと読む地名なのですが、それに注が付けられており「令音郎定反。支音其兒反」となっております。郎定反とは反切といい、A、B反とはAの先頭とBのおしりをくっつけた発音にする。郎定反は郎のルの発音と定のエイの発音をくっつけて令をレイと発音するということです。次に支の音は其兒反となっています。支は其のクの発音と兒のイの発音をくっつけて、キと発音するというわけです。つまり支はシではなくてキだということを示したものがこの注です。誰がこの注をつけたかと言うと、陳寿その人がつけた可能性もなくはない。少なくとも裴松之という五世紀の人が全体に注を付けていますからそれとの間、陳寿自身でなければ

ば裴松之に至る早い段階でつけられた音に関する注と考えられます。

そこに支の注があり、支はシではなくてキ、令支はレイキと発音するのだと書いてある。これを私は三十年以上前に見つけて大喜びし、早速音韻の専門家の尾崎さん（尾崎雄二郎＝中国音韻史の研究他）の所に飛んで行って報告したわけです。そうすると尾崎さんが直ちに次のように答えられました。

「それは、ここ以外はシと読むという証拠です。つまりシと読む所にはシと読む注はないわけで、それに対してこの箇所はシでなくキと読むべきだという注なのだから、逆に言うと、他は全部シと読む証拠である。」

私にはそのときに尾崎さんから聞いたことが頭にこびりついていました。倭人伝の支はシであり、キではない、という頭になってきたわけです。それで今になるまで読めなかったわけです。

ところが冒頭の倉田命題つまり、「倭人伝の術語は中国側が書いたのではなく倭人が書いたと考えなくてはおかしい」という問題を思い出して、言われてみれば確かにその通りだと思えるようになってきました。本来は倉田命題が出た時、尾崎理論は壊れて良かったのですが。

なぜかという尾崎さんは全部陳寿が書いた、という建前で言っている。ところが倭人が書いたとなると倭人側がその漢字をどういう音で使ったかということであり、それは陳寿に解るはずはないのです。

簡単に言えばシかキか解らないということです。支がキであれば先程ように次々と意味が取れてきました。倭人伝の場合はキなのです。

では倭人伝が全部キかという、そうでもないとは思っています。というのは伊都国の項で「伊都国に到る。官を爾支といい」とありますが、これはどうもニキではなくてニシではないかと思っています。これは博多に住んでおられた児玉さんという方から聞いた話ですが、「博多の土地の人は主（ヌシ＝主人）のことをニシと発音します」ということでした。伊都国の場合もニキでは何の意味か解らないが、ニシなら主と言うことになり、意味が通じます。

漢字の流入

伊都国の官職の副の方は何か変な漢字です。泄護觚・柄渠觚などと非常に読みづらいです。他の本は大体我々は読めるのに、これは我々が読んでいる字の世界じゃない。中国から入ってきた文字は同時点にどっさり入ってきたわけではなくて、いろんな段階で入ってきているわけです。そうすると我々が読めるような漢字のレベルの世界、千字文的レベルの世界と、違う世界の漢字表現があるわけです。鹿児島の方にこのようなのがありますが。

伊都国の官名の方は古い、別種の、流入の時期・ルートがあったのではないかと思います。ここから先は推定が強くなるのかも知れませんが、先ほどの「遼西令支人也」の所で公孫瓚の遼西というのがあり、この令支というのは遼西の地名です。遼東半島の遼東に対して遼西と書いてあり、遼東半島より西側にある令支というのが出てくる。遼東半島より西と言うと北京に近づきます。北京に近くなることは類推が類推を呼びますが、あの有名な山海経で、「倭は燕に属す」というのと同様関係してきます。「属す」というのは意味が複雑ですが、何らかの政治的関係があったとは言えるのでしょう。政治的関係だ

けで漢字などは拒否したということはないはずで、当然漢字は入ってきているわけです。だから燕の側の漢字表記が倭国に入ってきている可能性がある。つまり縄文時代に、令支の支をキと読む形で、入ってきている可能性があるわけです。それで倭人伝ではキを現すのに支を使っている。論理的とは言えませんが燕に属したという歴史と、この遼西の令支が同じ発音だという可能性がどこかでつながる可能性がなくはない。要するに結論としてはそういう来歴のいきさつは別にしても倭人伝の大部分は支那の支をキと読むという、その立場で俄然すらすらと読めてきた。今回三十カ国が読めた大きな原因がここにあります。

歴史家の反乱

三国志を書いた陳寿は私の敬愛する歴史家ですが、歴史家は権力者の命令に従って歴史を書くわけですが、権力者が思いもよらない文章を潜ませることがあります。

倭人伝は全体としてみれば、卑弥呼を親魏倭王として書いています。ところが、倭人伝に「國國有市、交易有無、使大倭監之」とあります。「大倭をしてこれを監せしむ」と従来読んできたのが、「使大倭これを監す」と読みます。要するに卑弥呼の国は自分の国のことを大倭と称していたということです。

三国志では魏のことを大魏と書いてある。漢書では漢のことを大漢と書いてある。ほかのところは大をつけない。倭国側もこれを知っていて大倭と称している。陳寿は「倭国は我々と対等な立場を主張しています」ということを言外に述べているわけです。

歴史家の反乱は日本書紀でもあります。日本書紀ができたのは720年、そのとき40歳の方は20歳までは「評」で過ごしていました。21歳から突然郡になったわけです。そういう人が日本書紀を見たら全部郡で書かれている。当時の人が見れば、後の人でもしっかり読めば、嘘に決まっていることが解るように仕組みであり、歴史家も当然知っているわけです。

邪馬壹国と邪馬台国

三国志と後漢書では文章が違います。三国志の場合は邪馬壹国というのは7万戸の国全体のことで、ところが後漢書の方は7万戸の国の名前ではなくて「その大倭王邪馬台国に居す」と大倭王自身がいる場所を書いてあります。

5世紀の范曄にとって三国志は当然手元にある。読者の手元にも三国志があつて、そこには7万戸の女王国として邪馬壹国がちゃんと書いてあるわけです。しかしそれは7万戸はあつても大倭王のいる中心点の国名がないわけです。それを范曄は書いたわけです。後漢を対象とする記事だが、それを5世紀の記事として范曄が書いたわけです。だからそこには、今更7万戸の大倭王のことを書くのではなく、大倭王がいるところはどこか、それは邪馬台国だということを書いたわけで、両者全然矛盾しない概念です。

それを学者たちは単語だけ抜き出して、ヤマトにくっつけようとして、邪馬壹国ではつけられないが、邪馬台国なら読めそうだから邪馬台国にしようということです。単語の抜き取り主義です。単語は文章の一部なのにそれをまったく無視したわけです。

史料の取り扱い

もう一つは、いわゆる唐代にできた隋書とか太平御覧などの中に魏志に曰く邪馬台国と書いてあり、それを根拠にしています。これは完全に資料の扱いが混乱しています。中国の南朝と北朝は別の系列であることを忘れているのです。

この前NHKでも「百済の時に文字が伝わった、それ以前は文字がなかった」と言って、それに上田正昭や山尾幸久さんが賛同していました。おかしいのは、百済は5世紀です。その時初めて文字が来たというような馬鹿な話はない。3世紀の倭人伝に明帝の詔書にちゃんと書いてあり、上表文を送っているわけです。

理由は明白です。唐は北朝の国です。北魏の系列の鮮卑の系列の北朝系の国です。北朝系の国にとっては南朝はなかったことにしているわけです。その証拠に卑弥呼のことが魏の時相通じると言う言葉は出ているが詔勅を倭王に与えたと言う話はないわけです。それでまた、卑弥呼が上表文を出すという話もないわけです。いわんや倭王武が長文を送った話もないわけです。これらのあることにしたら、その王朝を正規のものとして認めたということになる。だから北朝としてはなかったことにしておかなければならないのです。

日出る処の天子の意味

唐の初めにできた隋書は絶対に日出る処の天子を書かなければならなかった。これは隋書の中では大事な一節です。もとを正せば唐の高祖は隋の武将だったわけです。それが反乱を起こして煬帝の息子を殺したわけです。自分のご主人を殺して自分が天子に成り上がったのですから大反乱です。そういう形で唐ができたことを周辺はみんな知っているわけです。だからその弁解として日出る処の天子が使われているわけです。蛮族のくせに天子だなどと言ってきたのに対し、次の煬帝は、不愉快な顔をしたぐらいですませて、使いを送ってご馳走になって帰ってきた。そんなのは中国の面汚しである。中国の天子として我慢できない。だから我々はこうした。

唐はそれによって自分たちが逆賊扱いになるのに反論しようとした。だから唐になってすぐ隋書ができます。あの隋書の最大目的は自分たちが大罪のある天子を殺した正当性の証明です。唐は、我々は隋のようなことはしない、そんな失礼な国は潰す。隋書は倭に対する宣戦布告です。新羅が、国境に高句麗と百済の軍隊がやってきて困っていると唐に報告し、なんとか助けてくれと言ってきたのを口実にして、大軍を発して百済を攻めます。百済の国王・大臣を捕虜にして長安に連れ帰りました。これは紛れもない侵略です。あれを中国は教科書に書かずに日本の侵略だけ書けというのはインチキです。(北京大学の人民科学院の副院長との話は省略)。

そういう理由で唐は隋書を作って、日出る処の天子を書いたわけです。そして百済を攻め、同盟関係を結んでいる倭国を挑発したわけです。そういう経緯から見ると日出る処の天子は絶対に唐としては書かなくてはならない文章です。

ところが倭国側にとって日出る処の天子など、今まで文字を全然知らない人間が書くと言うのはおかしいです。そこで百済のとき仏教に関係して文字が入ったという嘘を書いた。完全に嘘だと言うことをよく知っている。彼らは三国志も読んでるし、宋書も読んでるわけです。あれは魏王朝の南朝に居座り側の王朝の話であるから「なかった」ことにする。北朝側の立場からは百済の時に文字が伝わってそして上表文を書いたとい

う大嘘を書いたわけです。

中国と言っても北朝と南朝で立場が全然違っているということです。これと同じ問題があるのが、唐代の太平御覧で、これも北朝側で作ったものです。南朝側の事実には非常に疎いわけです。だから南朝側の三国志や後漢書で、南朝劉宋側から見れば、邪馬壹国が7万戸で邪馬台国は大王がいる処であると関係は明白です。それは、南朝は直接交通しているからです。

ところが北朝は鮮卑ですから遠くにいてそれを知らないわけです。だから北朝側の都合のよいところだけ取って作っています。だから北朝側の太平御覧とか隋書とかの表現は甘いし、ルーズで、証拠とするに足りないわけです。中国の本だからみな本当だとすることは間違いです。

矛と弟

古事記の中に天沼矛という言葉が出てきます。ところがこの矛という字を古事記の真福寺本で見ると弟という字になっています。(以下東京古田会ニュース=以下ニュース129号25頁 古事記にある銅鐸、鐸神社等と同趣旨であるため省略)

真福寺本の矛と弟のすべてのケースを調査しているうちに、重要な点を二つ発見しました。その一は古事記の中巻の神武天皇の所です(岩波古典文学大系=以下岩波古事記157頁)。八咫鳥に、兄宇迦斯と弟宇迦斯に神武に服従せよと言われ、兄宇迦斯は大殿にトリックを作って神武たちを機織りの機械のところで殺そうとしたわけです。それを弟宇迦斯が神武側に密告したために大久米命ら二人が、兄宇迦斯に、「大殿のうちにはお前がまず入って見ろ」という場面で「すなわち横刀の手上を握り、矛由気矢刺して、追ひ入るとき、すなわち己がつくりし押に打たれて死にき」と書いてあります。

ここで横刀(たち)という言葉と矛由気という言葉が出てきます。これは真福寺本では弟という字です。弟という字を矛と読んでいる。しかし、よく見ているうちに変なことに気がつきました。大久米命が横刀を持ってホコユケ矢刺しと書いてある。注でも意味ははっきりしないと書いています。横刀というのは大刀ですので、まっすぐでなく、そりが入っているのが横刀です。太刀でホコユケというのはあまり意味がないです。

ここで矛と書いているのは実は弟(オト)、つまりこれは音であると気がつきました。音行くは自動詞です。ここは「音行け」で行けは他動詞です。横刀ですから、振り回すと音が鳴るわけです。それで追いつめて、自分のトリックで人を殺そうとしていた機織りのところで自分が死んでしまうわけです。

真福寺本でははっきり弟と書いていますから、音が良いのです。頭部にはっきり「マ」じゃなくて「ソ」が書いています。本居宣長を始めみんなこれを矛に直して読んでいますがこれは間違いです。

もう一つは下巻の方で古事記も終わりに近いところです。履中記の中で隼人の、曾婆訶理がでてきます。ここでも隼人が悪者扱いされています。(岩波287頁)

隼人の曾婆訶理と言う男が、履中、伊邪本和気(いざほわけ)命の弟の水齒別命を騙す場所があります。要するに天皇になる候補になっていた、墨江中王というのを、お前殺してこい、そうしたら自分が天皇になってお前を大臣にしてやる。こう言って隼人の曾婆訶理を誘ったわけです。そうすると曾婆訶理それを本気にしたわけです。

「ここに曾婆訶理、竊かに己か王の厠に入るを伺ひて、矛を以ちて刺して殺しき」とな

っています（岩波287頁11行）。ここで宣長を始め従来の学者は、墨江中王が便所に入った、そのときに曾婆訶理が、中王が厠に入るのを窃かに伺っていて、矛を以て刺して殺した、と解釈してきました。この矛が真福寺本では、やはり弟の字です。

ここでも問題は矛で殺すのなら厠まで行かなくても廊下かどこかで殺せばよいわけです。そのうえ矛を以て厠に入れません。昔は水洗ではありませんから、上から落とすわけです。その場合跳ね返りがあるため一米半から二米ぐらい距離があり、両側に空白があるわけです。そこへ曾婆訶理は潜んだわけです。上から落ちたときの音を合図に殺した。音が正しいのです。音を合図に突き刺したということです。

後の学者は全員が矛に直しているが、みんな間違っている。音でこそ、意味があります。その後曾婆訶理が騙されます。頼んだ水歯別命は、それじゃお前と一緒に天下を取るのだ、その記念の杯をあげようと言って、まず飲んで、お前も飲めと言ってでかい杯で曾婆訶理が飲みます。目の前に大銃が来ると敷物の下にあった剣で殺した、と書いてあります。その前段階が厠で音に乗じて殺した話です。ひそかに厠に潜んでと言う話とぴったり合うわけです。矛では全然合いません。

間違いなく従来の古事記は矛という字と弟という字を混同して読んでいる。天沼矛の所も弟（音）だということは疑いない。細かく言うと八千矛の神のところでは歌の中は「ヤチホコ」となっている。（注 岩波100頁、104頁は夜知富許となっている）。しかし字の文章では八千弟（ヤチオト）です。その辺を私は完全に写真化しまして、弟と矛を全部マークを付けて論文を出そうと思っています。

銅鐸

（ニュース129号講演録中の銅鐸と同趣旨の部分省略）

古事記の中に銅鐸が役割を持って出てきている。「こおろこおろ」も銅鐸が鳴る時の音です。古事記は大体近畿で作られている。小型、中型、巨大銅鐸など銅鐸だらけの世界で古事記が伝承されているのに銅鐸が一個も姿を現さないとすればそれはおかしい。ぬ（鐸）だけなら沢山出てきます。ぬは銅鐸です。銅鐸が一切ない古事記に宣長は書き換えて明治以降もそれを受け継いできたということです。

被差別部落

同じような問題が被差別部落でもあります。近畿は被差別部落の王国のようなものです。九州でもそうです。これの一番はっきりした証拠、証拠というと語弊がありますが、角川の地名辞典です。県別で出ています。あれが非常に便利なのは各本の最後に4、50頁も字地名表が並んでいるわけです。あれは非常に役に立つのです。ところがその中で三つだけ字地名表の無い県があります。福岡県と奈良県と大阪府です。無い説明も書いてないわけです。

理由が解らないので、中の人を通じて聞くと非常にはっきりしたわけで、要するにあれをつけるには県の教育委員会のOKがいるわけです。つまり字地名を見れば、他所の人は解らないが、現地の人が見ればそれは被差別部落だと言うことがすぐ解るわけです。それがいやだからNOと言うことです。言い換えれば三つの県は被差別部落があふれている県です。

それだけあふれている被差別部落が、日本史をやっても全然出てこない。被差別部落の

王国のような九州から近畿の中で、古事記や日本書紀に被差別部落が全くないと言うのはおかしいのです。

これと関係するのが高句麗好太王碑です。(以下ニュース130号講演録中の好太王碑文と同趣旨のため省略)

海幸山幸と被差別部落

古事記に海幸・山幸の話があって、弟が勝った時、「僕(あ)は今より以後は汝命の昼夜の守護人の爲りて仕へ奉らむ」(岩波143頁)とあります。つまり海幸の子孫が山幸の守護人として昼も夜も仕える守護人になりましょう、ということです。当然だから天皇陵も彼らが守護するわけです。海幸の子孫が被差別部落の人となり天皇陵を守護しているわけです。

ここでは高句麗の場合と逆で、高句麗の場合は自分たちが土地を拡大してそこを支配した、支配された連中を守護人にした。墓守にしたのです。今度は天皇家がまず九州に天孫降臨という名前で征服し、今度は近畿へきて近畿のそれまでいた銅鐸の民族を支配した。支配された方を昼夜問わず守護人にした。まさに好太王碑の守墓人と同じです。好太王碑の場合は墓さえ守れば良いかのようにも見えますが、こちらは墓どころではなく、あらゆる場合に天皇に仕えて守る役目を仰せつかったということです。これが被差別部落の淵源です。

これを日本書紀の方は鹿児島島の隼人に押しつけています。隼人が今でも大きな声を出して天皇に仕えている、八世紀の律令制にも、はっきりその制度を書いています。

天皇家は九州王朝家からいろいろのものを受け継いでいる。九州王朝はそれ以前の金属器や縄文文化を受け継いでいます。それ以前は、いわゆる南九州はメガースさんの地図のように縄文のメッカです。縄文のメッカで行われていた宮廷儀礼を九州王朝は真似しています。それは、彼らは我々に征服されて屈従させられている証しに彼らは我々に対してやっているのだ、とします。

近畿天皇家も律令制の中でそれを繰り返す、さらに精密に、たとえば即位の式の時は隼人を何人呼ぶか、中くらいの隼人新米の隼人何人とか細かく決めている。外国の使者が来たときはどうするかも律令制に続いているわけです。

それは隼人が、近畿天皇家よりも、また九州王朝よりも前から儀礼の王国であった、ということの裏返しです。つまり差別するということは差別される相手がそれ以前には今の権力者よりもっと上位の神聖な存在であった証拠です。

古事記序文

次に古事記の序文の問題があります。古事記序文というのは私にとっては懐かしい昔の思い出のある史料です。昭和20年敗戦の時仙台の東北大学に入学し、そのとき村岡先生が日本史の教授でした。特殊講義で扱われたのが古事記序文でした。山田孝雄(よしお)という有名な言語学の先生がいましたが、その人が書いた古事記序文の講義の本でして、村岡先生はいつも論点は自分と意見の違う学者の話を書いて、自分がこれに対してこれは反対だという形でやられました。

どういう問題かというと古事記序文は漢文が主だというのが山田孝雄説、村岡先生は和文が主でそれを漢文になおしたに過ぎない、という立場でした。

私はそれを聴いて、昭和20年の5月半ばでしたが、東北大学の図書館に行って、園山打算の本を見たわけです。そこに、唐代の孔安国が書いた尚書正義という本があって、そこから古事記序文は引張ってきていることを知りました。これは山田孝雄さん以前から、武田祐吉も指摘していました。

上段が尚書正義の文章、下段が古事記序文の文章です。たとえば一番目で尚書正義では混元初闢というのが古事記序文では混元既凝となっています。以下どれをとっても非常によく似ています。

これだけ似ていれば粉飾どころではないです。しかもより重要なことはこの尚書正義は何をやっているかと言うと、秦の始皇帝の墳書坑儒というのがありました。あの時四書五経とかが焼かれて殺された。その後前漢になりましたが前漢は困ったわけです。儒教を復興しようとしたわけですが本がないわけです。そこで晁錯という学者が伏生、名は勝という九十何歳の老人博士から、彼がものを記憶するすごい力をもっていた。その記憶するのがすごい言葉が古事記序文と一緒にあります。

形態がよく似ている、まったくそっくりの表現が使われている。ですから粉飾というとき単語を使わせて貰ったのが粉飾。ところがこれだけ沢山単語が似ていたら粉飾というレベルを超えている。それだけでなくストーリーが一致している。老人が若者になっている、晁錯が太安萬侶になっているだけの同じストーリーです。

私は若い頃これは盗作だとすぐ思いました。その後村岡さんから発表しなさいといわれ、5月の後半に発表したのですが、下手で半分もしゃべれないうちに時間がきました。6月に入って続きをやりなさいと言われましたが、よく勤労働員があって、古河に行ったので、後半は発表できずじまいでした。それから後に、二十代の終わりに神戸にきて直木孝次郎さんの続日本紀の研究会で話したら、それを論文にしなさいと言われて論文にしたのが続日本紀研究会の雑誌にのりました。それから私の「多元的古代の成立上・下」(駸々堂出版刊)の中にも入った、そういう経緯です。

古事記序文の新たな疑問

ところが私はこの序文についてまた新たな疑問を最近感じ始めていました。一つは、今の中国の聖天子と比較する場合、中国の堯舜のような聖天子より、日本の天武や元明の方が偉いという言い方をしています。天武の場合はまだ控えめに言っていると取れないこともないのですが、元明になると完全に聖天子、堯舜より元明の方が格が高いとはっきり書いてあります。これを中国が見たら怒ります。「国家安康」の問題ではないけれど、日本を占領してもおかしくないほどの問題です。ということを当然漢文が読める学者は思ったわけです。古事記がキャンセルされた一つの理由がそこにあるのではないかと思います。

その後さらに問題が進展しました。それは、稗田阿禮が若いときにこれを覚えさせられたにもかかわらず、それを書き取ったのは元明の和銅四年です。二十八歳の者が和銅四年まで何年経っているかと言うと、もしこれが天武の最晩年であったとしても、二十六年ぐらい経っています。天武の初年だとしたら三十何年経っていることになります。その間稗田阿禮が生きておれるという保証はどこにもありません。それを書き取らずにきたということがおかしいです。

このことを私は何年か前に書きました。銘文が出てきて官職名や表記が一致したためそれ

までの偽書説は学者の間では壊れました。しかし壊れた直後から私はその問題に改めて疑問を持ったわけです。

古事記序文のもう一つの問題

さらに今回気がつきましたのは、この序文は内容がおかしい。天武のことは壬申の乱を含めて長々と書いていますが、天智や聖徳太子のことが一切出てこない。

壬申の乱は古事記の本文にないにもかかわらず長々と書いてあり、改新の天智や十七条憲法の聖徳太子は一切書いていない。それはおかしいのです。仮に八世紀に元明と元正と、あるいは、天智系と天武系の二派があったとしますと、天智系はこの序文を見たら怒るでしょう。なぜ天智天皇のことを一切書かないのだと。聖徳太子派の人も怒ったでしょう。喜んだのは天武派だけです。外部の中国人が見たら怒るだけでなく、内部でもこれを見たら非常に怒ると思います。

考えてみると和銅五年の元明の古事記を書き取ったそのときは、日本書紀は当然なかったですが、日本書紀のもと本もなかったのじゃないかと思われます。言い換えると大化の改新も十七条の憲法も近畿天皇家の歴史にはまだ入っていなかったのじゃないか、だから書いていないのです。

そこで前の問題を振り返ってみますと、序文は明らかに盗作です。しかし太安萬侶が書いたことは間違いなしだと思います。銘文と一致しています。だからと言って太安萬侶が盗作をしなかったという保証はない。つまりこの内容は信用できない。早い話が、天武天皇がそんなことを言ったということは日本書紀に全く出てないです。

天武天皇の名前

さらに天武の名前もおかしいと思います。「飛鳥の清原の大宮に大八州御しめしし天皇」とこうあります（古事記序文）。これはおかしいです。最後の一年間浄御原にいたと書いてありますが、本当の名前が出ていないです。本当の名前はなんとかかんとかの真人になっています。ちゃんと書けばいいのに書いていないです。（注 日本書紀には天淳中原瀛真人〈あまのぬなはらおきのまひと〉天皇となっている）。

また、丹比真人（たちひのまひと）は人麻呂に成り代わって作っています。（注 万葉集巻2—2 2 6は〈丹比真人名欠けたり、柿本人麻呂の心をあてはかりて報ふる歌一首〉となっている）。あれは天武と同格なんです。名前が誰か解らないというのは大嘘です。7世紀後半の人物なのに8世紀後半に名前が解らない、天武と同格の人間が解らないと言うことは嘘で、解っていても書けないだけです。

結論を言うと天武は真人だった。九州王朝から任命された真人が天武であって、天皇ではなかった。

三国志の場合は、最初は曹操が天子になっているわけですが、本当の天子ではなく、その息子の文帝から本当の天子になります。本当の天子の親は臣下であったが天子に扱っている。三国志の場合は一人だけです。しかし北魏の魏書はもっとひどいです。鮮卑がやってきて洛陽を支配した。それまでは鮮卑の部族であった。その部族の長が全部天子・皇帝と書いてある。現在皇帝であるから、先祖は全部皇帝です。それを日本書紀は真似しています。701年以後は天皇家が天皇になりました。だからそれ以前も全部天皇になりました。日本書紀に天皇と書いてあるからそれは疑いないというのは駄目です。

全然史料批判の基本ができていない。天武は九州王朝から任命された真人にすぎない。

虚偽に満ちた日本史

日本史に多くの嘘がありますが、その第一は701年から評が郡に変わっているにもかかわらず、郡にするという最も重要な詔勅が姿を消していることです。要するに明治以後の学会は別に真実を求めるのではなくて近畿天皇家を擁護することだけを考えているのです。

本当のチェンジは今のように真実を真実として明らかにすることです。被差別部落の歴史があればそれとして明らかにする。九州王朝の歴史があれば九州王朝として明らかにする。それがなければチェンジといえない。明治の「天皇は神聖にしてこれを侵すべからず」というあれをそのまま引きずって現在に至っています。

昭和天皇の歴史には白村江で負けたことをはっきり書いてある。陸士や海兵でも白村江で負けたことを書いていたらしいのです。国民はみな、負けなかったという教科書で全部習わされていました。だから今度の戦争も負けなよというので戦争に追い立てた。馬鹿な一般国民とエリートの支配者とは歴史教育が違わされていたのです。それが今度の敗戦です。

今も同じです。古田武彦が九州王朝説を唱えているとか、邪馬壹国説を唱えているとか言うことは大体知っているわけです。教科書を編集している人たちが読んでいない人はいないと思います。しかしそれはあくまでエリート用であって、一般の国民は九州王朝などなかった、邪馬壹国はなかったことに教科書を作ればよろしい。それで今まできている。

古事記序文はまったく信用に足りない。701年以前の日本史は信用するに足りない。私は天皇家をよく言うのでも、悪く言うのでもない。どちらかのイデオロギーでやることは全部インチキです。

今言ったような問題は日本だけではない。日本は地球上全体のサンプルです。

バイブルも大嘘です。先頭からして嘘です。ヘブライ語の原本では神々が宇宙を作ったと書いてあります。それを英語で単数の神に改竄しました。独仏西露語訳など全部単数形に直している。つまりエホバの神が宇宙を作ったという大嘘のバイブルにしているわけです。極東裁判にしても嘘の合理化のもとに行われました。そういう嘘から解放されて、真実を真実として、どちらに味方とか敵意とかなしに追求できるようにしなくてはならないと思います

謡曲柏崎

この間「柏崎」を見て驚嘆しました。佐渡島の対岸にある柏崎で、姫が気が狂います。なぜ気が狂ったかという、夫が鎌倉に訴訟に出かけるが、死んでしまう。息子が出家して逐電してしまいます。一度に夫と子供をなくして一人になってしまう、空しくて堪えられずに気が狂ってしまった。最後に息子に会ったように思って消えてしまう話になっていて、そのように本に書いてあるのですが、それは本当の解説ではないと思います。なぜかと言うと、今のような話は別に柏崎である必要はないのです。柏崎で気が狂ったということが問題なのです。

柏崎は対岸が佐渡です。佐渡は訴訟で順徳天皇が流されてそこで死んだ場所です。（注

順徳天皇は承久三年（1221年）佐渡に流され仁治三年（1241年）佐渡で没した。享年46歳）。それから法然や親鸞などをつまらない理由で流罪にして、後鳥羽院の女房が法然の弟子の住連・安楽に帰依して出家したことに後鳥羽院は激怒し、建永元年（1206年）住連・安楽を五所川原で斬り殺しました。法然は承元元年（1207年）土佐（実体は讃岐）に流され親鸞は越後国国府に流されました（承元の法難）。それをやったのは後鳥羽であり、後に承久の変で隠岐島に流されます。

法然を罰した順徳は佐渡島に流されて死にます。いわゆる訴訟を起こして、幕府追討の宣旨を出しますが逆に幕府の動員令であえなく破れ、流されて死ぬわけです。それが佐渡島です。その対岸が柏崎です。つまり書いてはないが謡曲「柏崎」の主人公は順徳であり、そして主たる舞台は佐渡島です。

しかもそれは訴訟に巻き込まれて非業の死を遂げた順徳のいる佐渡島の前です。つまり権力者はそういう形で悪いことをしたら非業の死を遂げるのだと言う教えです。それを観阿弥は書いているのです。それをカットしてただ単に死んだという解説しか書かないのは駄目です。

天皇の墓が柏崎にあるのを原点にしている。そこで気が狂って消えるわけです。まともに言うと権力者批判になります。気が狂って言うと問題にできない。消えて終わってしまうと余計問題にできない。そういうドラマの設定をして、権力者批判をやっている。この批判を感じたのか、世阿弥は佐渡島に流されます。何で流されたか書いていませんが、その辺の真相を察知した足利幕府が流したのではないかと、推察しますが、要するに「柏崎」と言うのはすごい権力批判の典型です。

このようなのが色々あります。たとえば君が代に関係する老松（日本古典文学大系40 謡曲集上213頁以下）の場合でも、京都の天満宮があり、そのの氏子だという話から始まります。お告げがあって自分は九州の天満宮へ参詣しているところだという。次の場面はそこに移ります。そして最後は、君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりてこけのむすまで、で終わります。

福岡で千代というと県庁の所在地が千代です。そこに翁別神社（おきなわけじんじゃ）というのがあります。これは被差別部落の神社です。この辺は今はビルが建っていて、その横の公園の中心にある神社が翁別神社です。そこに能面のような鼻の高い面が二つ置いてあります。

ついでに申しますと最近南米問題が大発展してきました。南米に日本語地名が一杯残っていましたが、そこに甕棺（みかかん）がありました。その上翁の能面の顔とそっくりなのが沢山作られていたわけです。最初は何でこんな所に能面があるかと思いました。ところが南九州は能面の宝庫です。その一端で福岡県は能面の舞楽の場所です。その神社が翁別神社です。

柿本人麻呂

柿本人麻呂は島根県で死んだということは有名です。ところが私が15年ぐらい前に行ったときに、戸田という所で柿本人麻呂がここで生まれて、七才までいたという話を聞きました。それで今度望月さんにそれを話したら、望月さんがそこら中まわってきました。やっぱり浜田市の戸田というところで生まれていました。（注 浜田市に戸田柿本神社というのがある）。

それで七、八歳の時に才能、天才を発揮しました。それで都から呼びに来て都に行って教養を積んだということです。それで二十歳ぐらいまではやはり石見にいて、それでしばしば都に行っていたらしいのです。

雷山

それから後九州王朝の歌人になったわけですが、大君は神にしませば（万葉集3—235）に出てくる雷山が大和の雷丘と言うのは大嘘です。わずか20米ぐらいの所に天武天皇が現れて貴方は神様です、などというおべんちゃらを言うなんて、全くばかばかしい。（注 万葉集235番では雷岳と書いているが大和には雷岳はなく、学者は雷丘〈高さ20米〉をあてている。近くの天香具山も152米あり、雷丘をあてるのはアンバランスである。なお万葉集自体の注に、或本に云く、として雷山の名が見える）。現代の歴史の本でもあの歌が昔は天皇は神様と思われていました、とそう覚えさせています。一方九州の雷山は、背振山脈の雷山（955米）で、筑紫の君の墓所にびったりです。そこで、大君は死んで神様になっておられますので、静かにしておられます。しかし民衆は荒れ果ててしまいました。九年間に六回も数千人で唐軍がきているわけです。君主に対するクレームの歌です。

つまりそこに現実にいるのは唐の占領軍です。唐の占領軍はだいぶインチキな占領軍です。自分たちが隋の天子を殺した。その罪名を濯ぐために倭国を悪者にして、日出る処の天子などとあんなことを言うヤツを許しておけない、それでその同盟国の百済に侵略して、機運に乗じて、占領した。彼らは嘘の理由で倭国を占領した。まさに逆襲の侵略犯です。それを人麻呂は当然知っているわけです。だからあの歌の本当の目的は唐に対する批判です。

偽りの理由で他国へきて、宮殿から神籠石から壊して回っているわけです。庶民が疲れ果てています。唐の外国軍に対する批判です。直接の理由は筑紫の君です。これは言葉に表している。ところが唐は一度も言葉に出ていない。出てないのが本当の主題なのです。唐という言葉を一言も出さずに唐を批判している、すごいことです。最高の歌です。

黒潮

和歌山で人麻呂が若いとき作った歌で、古い家があって、かつて大和にいる恋人と一緒に来て華やかに過ごした。それが今や荒れ果てていて何物も残っていないという歌を歌っています。（巻9—1798）これも実は本当の主人公は黒潮です。黒潮が流れているでしょう。かつて私は恋人と過ごした。今はその恋人が死んで空しい気持になっている。しかし黒潮は昔も今も変わらず流れている。黒潮と一行も出ていないけれど、本当のあの歌の主人公は黒潮で、すごい歌です。（注 「人麻呂の運命」325頁以下に詳しい）。そういう歌を若いときに作った人麻呂が今度は筑紫で「大君は神にしませば」の歌を作ったのです。

人麻呂が行った都はどこか

人麻呂を奉った神社は日本中に120ほどありますが、その八割は山口県にあります。人麻呂の歌碑を作って喜んでいるのが日本人かと言いたくなりますが、それは日本全体でなく大半山口県です。

船氏の王後の銘文があります。あれを旧天皇家と結びつけてきたが実際はそうではなくて、三代の九州王朝の天子を指しています。その中で王後がいた豊浦宮というのは山口県の豊浦宮です。

神功皇后も豊浦宮にいました。今は下関市になりましたが、あそこに神籠石が山口県の東の端まで行っています。理由は、豊浦宮が山口にあり、乎娑（おさ）は博多にあり、飛鳥は小郡市にあります。

つまり三つとも神籠石の内部にあります。これを近畿天皇家に結びつけることはできないのです。

人麻呂の時に都と言うのは豊浦です。豊浦というと石見からすぐそばです。そこで評判になったというのは非常に解りやすいわけです。

崇神天皇

東日流外三郡誌の中に崇神天皇が韓より渡来して、大和にいた神武系の天皇と戦ったという話が出てきます（注 和田家資料2 104頁）。はっと思ったのは江上さんの騎馬民族渡來說です。あれはアウトだと考えていました。その理由ははっきりしておりまして、もし江上さんの言われるように騎馬民族が渡来したのであるならば、当然好太王碑に書いているはずです。好太王は騎馬民族の本家本元です。しかも百済や新羅や倭をすごく批判している。特に属民であると書いてあります。倭が高句麗の片割れなら、自分の所に行ったわけです。分派が刃向かっているのは怪しからぬとらなければおかしい。江上さんの説では好太王碑の100年ぐらい前のことですからそれを忘れてはいるはずはない。

後に江上さんは4世紀の終わりに変更しましたが、いよいよおかしい。その時期ならまさに日本に渡ったと好太王碑に書くはずです。江上さんにそのことを手紙に書きましたが、答はなく、森さんとか奥野さんも江上さんに代わって答えては来ていません。

江上説はもう一つ難点がありました。江川説の論拠はミマキイリヒコ（崇神天皇）のミマキとミマナの関係でミマキはミマナから来たのだという地名比定とか人名比定が江上さんのヒントになっている。それは本にも書いておられます。その場合考えるとミマキもミマナも日本語です。倭人伝ではナンバーワンはイキマです。

壱岐からきた占領軍の長官がナンバーワン、ナンバーツーがミマシです。筑紫のシです。筑紫を支配しているのがミマシです。三番目がミマカキ。カは神聖な水、キが要害、水城になった前の三世紀の姿で、要所要所にいます。それとの一環であるのがミマナです。玄界灘を挟んで両岸に、日本側に二つのミマ、北側に一つのミマ、その三点セットになっているわけです。当然みな日本語なのです。

崇神がもし騎馬民族だったら、中央アジアから日本語を使いながら来たということはありませんし、朝鮮語とか高句麗語を習って日本列島に侵入することもありません。また日本列島に侵入した途端、高句麗語をやめるなどということもあり得ない。

ミマキイリヒコというのは日本人の名前です。それを騎馬民族と考えるのがまず間違いです。言語について江上さんはよく考えなかった。ミマキイリヒコは日本人で日本語を使っている。ミマナは韓国側の日本で、九州側と韓国側の両岸が倭地です。そこでミマナと言って北方の領土としている。倭地を支配しているのは倭人です。

倭人の朝鮮司令官と言いますか、それがうって返してヤマトに来た。つまり自分たちの

親戚かご主人か、元々神武の後を受け継ぐ王朝と戦って勝ったと言っている。そのことを書いている東日流外三郡誌は大変なものです。

やはり大事なことは天皇記・国記を探ることです。何カ所もお天皇記・国記を写した人の名前が出てくる。その人たちは写したものを大事にしているはずですが、偽物だと言われて困っているかも知れないが自分では大事にしているはずですが、それを探したら天皇記・国記が出てくると思います。写本で結構。実物も石塔山の近くにあると思います。

(以下ニュース130号11頁と同趣旨につき省略)

岩波文庫 新訂 魏志倭人伝他

岩波文庫の魏志倭人伝ですが、これが日本歴史に大変な禍と言うか害を与えている。私は各部屋にばらまいてあるぐらい、何冊買ったか解らないほどで、お陰を被っているのですが、同時に害を与えているということに、遅まきながらやっと気がつきました。

例を挙げると本文では「邪馬壹国に至る」とあります。そこに注がありまして、邪馬台の誤りとするのが定説であったが、近頃邪馬壹国(ヤマイ)説も出ている、とこう書いてあります。

これは誰の説かと思っていました。邪馬壹国説なら私の説の気がするのですが、私は「ヤマイ」と読んだことは全くない。むしろそう読むべきでないと、『「邪馬台国」はなかった』で21頁使って一生懸命書いてある(同書314頁以下)。その理由もはっきり書いています。

これは私の説でないと思っていたのですが、以前大野晋さんから葉書で「古田さん、邪馬壹は〈ヤマイ〉とは読めませんよ」と好意的にそういう忠告をしてこられたことがあります。それでまだ『「邪馬台国」はなかった』を読んでおられないなと思って送ったのです。またしばらくしてまた葉書が来て古田さん邪馬壹国は「ヤマイコク」とは読めませんと言って来られました。本を送られたから必ず読まなければならないということはありませんが、二回そういうことを書いて来られたわけです。

『「邪馬台国」はなかった』を読めば解りますように、私が重視していたのは橋本進吉の音韻説です。これによると片仮名のイは最後に来ない。最後に来ない母音の例を挙げられまして、この中でイは割合例外が多いということも書いておられる。しかし例外は、例外が多いからその例外だと言うのではなく、わたしはイと読むべきではないだろうと、ごたごた論じているわけです。

橋本進吉さんは大野さんのお師匠さんですから、その説をもとに考えられたに違いない。その説をもとに書いてある『「邪馬台国」はなかった』を読んでない。再度にわたってそういう忠告があったからです。今回考えてみると、大野晋さんは岩波文庫を読んで、そこにこう書いてあるから古田は邪馬壹国を「ヤマイコク」と読んだと思いこんでいる、それを親切心から再度にわたって私に忠告して来られたのではないかと、最近読み直してみても、思ったわけです。

會稽東冶

さらに「当に會稽の東冶の東にあるべし」(45頁)とあり、原文に「当在會稽東冶之東」(169頁)とあります。これに、「県の名。今の福建省閩候県附近。東冶とするものあるは東冶の誤」と注が付いています。こちらは本文を直してしまっています。先は

邪馬壹と書いて「ヤマイ」と読むものもあると書いてあった。今度は誤りという判断のもとに本文を書き換えている。三国志は東冶なのを後漢書が東冶と書いてあるから、間違いだと言う判断のもとに本文を訂正している。私は『「邪馬台国」はなかった』で大変な頁数を使って論じているわけです。その結果ははっきりした答えが出たわけです。というのは三国志の中に「会稽南郡をもって建安郡と為す」（永安三年）という記事があり（呉志三中華書局版1159頁）、それを調べて行くと、見事に符合しており、それ以前は会稽と表現されそれ以後は建安と表現されていた。もし東冶県であるとしたら、建安東冶でなければならない。会稽東冶とは書けない。それを後漢書の范曄は見逃したわけです。理由は後漢時代には会稽に東冶県というのがあったからです。その頭があるから、これで良いと思って会稽東冶の東と書いた。三国志の「冶」を范曄が訂正したが、東冶が正しい。東と言うのは海岸部を「東」をつけて使うのは中国の習慣ですから、会稽郡の所は東冶です。会稽郡の東にあたる、ということでその通りなのです。

すごいのは安日彦長髓彦が浙江省から筑紫へきているでしょう。それが会稽東冶の東です。そういう単なる地理的なことだけ言っているのではなくて文明が東へ移ったことを陳寿は知ってそれを背景にして歴史を書いたわけです。ところが後漢書の范曄はそこまで知らなかったわけです。才気ある歴史家ではありますが、そこまで頭が回らなかったということです。後漢に会稽東冶があるから、それでよいと思って直したわけです。しかし、会稽東冶は浙江省よりはずっと南です。その東となると台湾か、沖縄あたりになります。九州ではなくなるわけです。

しかも倭人伝では一万二千里を道里からと見ているから会稽東冶の東になるのでしょうか。そういう意味では正確です。一万二千里で台湾の方まで行っては駄目なのです。范曄はそこまで地理的知識がなかったということをおぼろげに言わざるをえない、と『「邪馬台国」はなかった』で大変詳しく論じています。

岩波の石原道博さんはそれを知らずに東冶が正しい、後漢書が正しいとして魏志倭人伝の原文を、後漢書風に改悪して、改悪の裏打ちの注釈をつけているのです。

景初二年

もう一つあります。魏志倭人伝で卑弥呼の使いが来たとき、「景初二年六月、倭の女王、大夫難升米を遣わし郡に詣り、天子に詣りて朝献せんことをもとむ。」とあります。この注釈で「明帝の年号。景初三年の誤り。日本書紀所引の魏志および梁書は三年とする」としています。

この「景初三年の誤」という所は、本文は直さず、注釈で誤りであると言っています。理由は内藤湖南が挙げたものをそのまま丸写しにしている。これは私が『「邪馬台国」はなかった』で非常に力を入れたところです。つまり戦中遣使か戦後遣使かの問題です。内藤湖南などは、戦中遣使は無理だ、戦後でなければ送れない、そこで証拠にしたのが唐代の梁書です。私は、それは間違いである、なぜなら景初二年に行ったのは十月の秋です。明帝が死ぬわけです。そこで約束した、これだけのものを送る、と書いてあるのに約束したものを送らなかった。年を越えて一年近く経って改めて魏の側から使いを派遣して同じものを届けたわけです。あれが景初三年であつたら、明帝が死んだ後ですからおかしいわけです。持ってきた人に渡せばよいのにこちらからわざわざ届ける意味がないわけです。しかし景初二年であつたら、明帝が死んだという事件が入るから、明帝

が生きているときに約束したのはできなくなる。そこで約束を果たすために魏側から使いを派遣して約束を果たした、と言うことです。非常に素直に辻褄があうわけです。他にも五つぐらい理由を挙げていますが、それが間違いだ、やはり景初三年が正しいと言うのであれば私が言った理由にちゃんと反論して、それは間違いである、景初二年にしたらこの点が具合が悪いと、景初三年にすれば約束を違えた理由がもっとはっきりする、という論証がなければならぬ。そういう論証を誰もやっていないのです。松本清張に至っては、邪馬壹国は間違いだ、古田の言っていることは正しくない。景初二年のことを景初三年と書いてある。岩波文庫もちゃんとそう書いてある、と松本清張に対して岩波文庫が権威者になっています。松本さんはよく資料を調べると言うが嘘です。若いときはよく調べたのですが、後に忙しくなったら調べる暇はないから、岩波文庫で勝負しだしたのです。彼の晩年の墮落です。

京大の人文科学研究所教授の富谷至さんも同じことを書いてある。京大の学生時代に『「邪馬台国」はなかった』を読んで刺激を受けたということを書きながら、古田が言っていることは間違いだ、その証拠に景初三年の所を二年と書いてある、というわけです。明帝の急死の問題も全くノーカウントで私の批判を書いてある。(注 なかった6号146頁以下参照)。

松本さんはともかく、京大の教授が忙しすぎて私の『「邪馬台国」はなかった』を見ずに、学生時代に読んだことだけに頼ってそう書くというのは一寸問題にならないと思います。いつでも京大に行きますと言っているのですが、まだ何も言って来ておりません。この人も私の本を取り出して見る労を省いて岩波文庫で、そこに景初三年の間違いと書いてあることに拠ったわけです。

松本清張、京大教授、大野晋氏、みんな岩波文庫で勝負している。日本の学会だけでなく大家も墮落しています。

以上のことは前から気がついていたのですが、その理由を今回初めて知りました。遅いですが、今回改めて最後に参考文献と書いてあるものを詳しく見ました。その中に古田武彦と載っている。三つ私の論文が載っている。第一が「邪馬壹国」(史学雑誌 七八一九昭和44年9月。これは私の最初の論文です。次が「好太王碑文の「改削」説の批判—李進熙氏「広開土王碑の研究」について」(史学雑誌八二—八) 昭和48年8月。三番目が「邪馬壹国論争」(東アジアの古代文化) 十二・十三 昭和52年5月・11月。アツと思った。これには『「邪馬台国」はなかった』が載っていない。「失われた九州王朝」も載っていない。「盗まれた神話」も載っていない。尾崎雄二郎さんや牧健二さんと論争した「邪馬壹国の論理」も載っていない。ということはあれはみなカットすることになって書かれているということです。

出版社の責任

岩波文庫魏志倭人伝の初版本は和田清・石原道博編訳という形で、昭和26年(1951)に出た、その後連年版を重ねて、昭和58年に発行部数では255、000部に達しました。その後昭和59年に改定して石原道博編訳に変わり参考文献として昭和59年年までのものをなるべく多く追補したことになる(同書まえがき)。当然『邪馬台国』はなかった』などは出て十年近く経っている。ところが文献の題だけでなくその内容の論証は全部カットして書いてある。だから景初二年は三年も間違いとか、会稽

東治は会稽東冶の間違いと書いてある。「ヤマイ」とかいうのは『「邪馬台国」はなかった』を読めば書けない文章です。はっきり言って杜撰に書かれているのに、それを大野さんとか京大の現役教授が、あるいは松本清張などみんなこれを論拠に答えている。あえて言えば岩波書店の罪です。「ソクラテスの弁明」以来岩波にはお世話になってきている。「古代への情熱」もお世話になってきているのですが、それと同時に、これだけの本が流れ出ると、日本の学会が廃れ続けることになる。教科書審議会の人もおそらくこれを読んで、これに拠っていると思います。だから九州王朝もなければ邪馬壹国もないわけです。岩波に書いてあるのだから間違いないということになります。

私ははじめてこういうことを発見してビックリしました。これはやっぱり読者に良くない。みんながおかしい、おかしいと言えば出版社も直さざるをえない。ところが日本人は大人しいから、おかしいと思っても出版社にクレームをつけることをしないのです。その結果こういう形になっています。

質疑応答の部

質問1 次に〇〇次に〇〇と位置関係

魏志倭人伝の行路は狗邪韓国から順番に邪馬壹国まで来るようになっていきます。ところが邪馬壹国は次に次にとありますが、先生は順不同にされました。次に次にと書いてあるのに順不同とする考え方が一寸解りかねます。

古田

これはまず三十国を次々歴訪したと書いていますと、今おっしゃるような話になると思いますが、そうじゃないわけです。書き方が行路順ではないわけです。壹与の時に生口三十人というのがある。生口は地方代表であると考えたと三十国と生口三十人とが対応するのではないか。そういう場合でしたら邪馬壹国に至る場合のように行路記事になっている必要は全くない。なっている方がおかしいわけです。だから行路記事とそうでないものの区別をおさえて頂ければ問題は解けると思います。

質問2 長里と短里

後漢書は長里だと言われましたが、論衡に明らかに短里としか思えない下りがあります。人間が目で見たり声が聞こえるのは十里を越えないと書いています(文責者注=不過十里)。漢の時代は長里という理屈で行くと4^キ強のものを常に人間が見たり耳に聞こえるということにはなかなかならない。短里で行きますと750米ぐらいとすれば10里の外に出ないという書き方ですから人間の耳目は、目で見たり耳で聞いたりする範囲は750米も行かない事を王充が書いているわけです。王充は班固と同じ時代の人ですからもしそれが短里となると漢書は短里だったかという疑問が生まれてきます。もう一つは後漢書です。もしこの時代に長里であったとするならば王充が言っている、目で見たり耳で聞いたりするのは750米以内ですよという書き方との整合性教えて頂きたい。

古田

里数問題はいくら時間があっても足りませんがご質問の件に限定してお答えします。これは司馬遷の史記を考えて貰えばよく解るのですが司馬遷の史記は前漢が出ているわけです。漢代は勿論長里です。ところが中に短里も明らかにあります。「千里の馬」など出てきます。周代が短里ですから、その周代にできあがった概念を使って書いていけば短里です。

漢代の話は長里です。司馬遷の史記には短里と長里が併存しています。何回も書いていますが、それが基本的な史記に対する理解です。同じく論衡でも漢代です。当然それには周があつて漢になるわけです。だから周を受け継いで書かれた文章なら短里です。漢独自の文章なら長里です。この場合今の史記と違って論衡というのはそんなに沢山ないから、確定できる場合がありますけれども、使う場合にはその二つの可能性があるという頭で使わなければなりません。

質問3 拘奴国の場所

第一問 倭人伝に出てくる狗奴国と後漢書の拘奴国は一緒だということで質問させて頂きますが、倭人伝の場合は、邪馬壹国のあと、次に次に二十一カ国出た後に、「その南に」狗奴国があるとなっております。

ところが後漢書の場合は女王国から東に千里渡海し、拘奴国が出てくるわけです。基本的には南か東かで全然方向が違います。問題は千里だけでなく方向も重要な要素ですので、これが同じだと解釈する場合にはかなりの問題がでてくるのではないかと思います。

第二問 後漢書の方も倭人伝の方もから一万二千里となっておりますが、後漢書ではこの部分は短里と考え、拘奴国への距離だけ長里に考えるわけでしょうか。特に後漢書では拘奴国が東へ千里と書いてあるその一行後に「女王国より南四千余里朱(侏)儒国に至る」とあるのは短里ということでしょうか。

第三問 倭人伝では女王国より北はよく解っているように書いています。その後で、次に○、次に○、次に○ときて、その南となれば当然女王国の南が狗奴国となるのではないのでしょうか。

古田

第一問に対する答え

要するに倭人伝の場合は曖昧なわけですが、女王に属する国々の南に狗奴国があると書いていますが、女王国の南にとは書いていないわけですが、国を沢山、三十国並べてその端っこの南となっている。端っこがどこにあるかは倭人伝では正確にキャッチできないわけですが。

最後に奴国があります。要するに三十国あつて、その中の一端に奴国というのがあつて、その南に当たっていると言っているわけですが、それ自身は文章としては解るけれど女王国とはどういう位置関係にあるかは解らない形で倭人伝はできている。だから、客観的に誰が読んでも女王国との方角関係がどこにあるかということはないわけですが、それで私の解釈は、密かな解釈といえるかも知れませんが、京都府の北の日本海岸の籠神社のあの辺が端っこと見てその南と大体理解しています。しかしそれが絶対正しいという証拠は倭人伝からは出てきません。

いろいろの人がその人の主観で取っています、熊本だという証拠はない。女王国の南とは書いてないですから。女王国のそのものの南と書いてあれば、可能性が強くなりますが、書いてないですからその人の主観で熊本にしたいとかいうだけの話です。

私も何となく九州説や熊本説が多かったので、何となくそういうムードで書いた所が一カ所ありまして、早速読者の方からクレームがありまして、「貴方の論旨からすると熊本にならないよ」と。その人が書いていたのは「博多湾岸が邪馬壹国で鹿児島が投馬国でその間に狗奴国があったとして、それが女王国と対抗しているとするとおかしい」。その人とは詳しく議論してきたのですが、簡単に言えばそういうことです。私もなるほどと思い、それ以後は熊本説はまったく書いておりません。

それで繰り返しになりますが、倭人伝に関する限りでは狗奴国の正確な位置は解らないというのが厳密な答えだと思います。

それに対して後漢書は解るわけです。女王国の東とあります。女王国が決まれば当然それより東になります。方角がはっきりしている。問題は千里というのを、はじめは短里で千里だと思ったのですが、さっき言ったように後漢代にせよ、南宋、劉宋の五世紀にせよ長里の時代ですから、長里で理解するべきだと合田洋一さんの電話のご質問に対して回答しました。現在でもその考えは変わっていない訳です。

女王国から見て東に長里で千里の所にある。これは銅鐸圏ですから、明らかに三種の神器と対立していて不思議はないわけです。

第二問に対する答え

その通りです。後漢書は独創的に全部范曄が書いたのではないわけです。三国志をモデルにしている。三国志と共通な部分はいっぱいあるわけです。だから一万二千里もそれを受け継いで書いているわけです。その中で彼は、范曄の机の上にも三国志はあったわけだし、読者の机の上にも三国志はあったわけだし、いずれも一万二千里と書いてある。それを彼は一万二千里と書いたわけです。そこにいわゆる自分の独自資料を持ってきて、それが狗奴国に関する独自資料をそこに挟み込んだわけです。

その挟み込んだ例としては金印の記事がそうです。それと同じ例が狗奴国です。挟み込んでいるわけです。後漢書が全部長里になっているとか全部短里になっているとかそういう話ではないわけです。いずれにしても長里と短里の複合状態であることは変わらないわけです。さっきの司馬遷の史記と同じです。

第三問に対する答え

行路文であればそういうことであるが、不弥国までは行路文の形を取っている。その後の、次に、次には行路文ではない。資料の表現形態が違う。次に次にの表現は倭人伝だけでなく、この形式では地理的關係は解らない。他に、次に次にと書いてある用例の調査作業をやるべきです。そのもとになるのは三十国で、もしそれが行路文であれば、行路文だという証明をしなければならないわけです。

三十国の生口が地方代表としてその名乗りを書いているだけであり、その位置はどこか解らない。倭人伝では地理的位置は解らないというのが正解です。一方後漢書では地理的位置を明示しています。

質問4 周旋五千余里

第一問

倭人伝に「倭の地を参問するに（中略）周旋五千余里」とあります。一方で一大国から末盧国まで千余里と書いてありますので、概略長方形と考えると、倭国の地は一辺千余里ぐらいになるのじゃないかと認識しておりますが、先ほどの三十国の関係で、特に巴利国が尾張ということになると到底周旋五千余里ということにならないと思いますが如何でしょうか。

第二問

三十国というのは倭国の中に入らないのですか。

古田

第一問に対する答え

倭人伝で行路記事でない三十国は投げ出しているわけです。加藤院長のアイデアを修正採用しまして、生口三十人の出身地が三十国ということで、これは行路記事ではないわけです。巴利国というのは三十国の一つですから、行路記事の中に入れて考えるのは無理ということになります。

また1万2千里というのは帯方郡治から女王国までの総里程、今度は4千余里というのは女王国から出発して侏儒国に至る里程です。女王国が最終目標ではないわけです。女王国が倭国内の最終目的ですが、中国人にとっては本当の最終目的は侏儒国です。何故侏儒国ごときがと思う人がいると思いますが、それから先は一年かかって裸国・黒齒黒あり、というあの記事です。中国側を取ってはあれが女王国以上に大事なわけです。なぜかという漢書で班固が西の方へ、イラク、イラン、から西へすすんで行くと、そこに「日の入る所」に近しと。その日程が後でコロンブスが行った日程と一致しているわけです。つまり、今のアメリカ大陸に至る日程が書いてあって、それが「日の入る所」に近し、という情報をイラク、イランの古老から聞いて記録している。それは漢書が非常に優れた歴史書の価値であり、史記の司馬遷にはできなかったことです。彼はシルクロードの入り口で終わっています。それをさらに「日の入る所」まで班固は書いたわけです。

それに対して陳寿は漢書の及ばなかった「日の出る所」を書こうとしたわけです。「日の出る所」というのは今の侏儒国から東南の船行一年で日の出る所に近い。それを記録したというのが司馬遷の史記よりも優れている。さらに漢書の班固の及ばなかった世界を三国志は記載している。人類の地理的認識、これを得ようとしているわけです。歴史書は地理は関係ないと言う人もいますがそれは間違いです。そういう意味で言えば女王国は途中経過です。里程で書いているのは彼らが行った所だからです。

これも意外な裏付けが出てきたのは、いわゆる稲作の放射能測定です。当然ながら博多湾岸・佐賀県などが古いのですが（BC1000年ぐらい）、それに次ぐのが奈良県ではなくて高知県です。高知県が接続していて、それから一寸間隔を置いて近畿です。この事実を歴博が図に書いたりしているのですが、何故ですかと聞いたら、解りませんという答えです。

我々には解ると言うのが生意気ですが、私はさっきのように理解しています。侏儒国というのは当然倭国によって支配された地域なのです。そこへ中国の使いが行って、ここから先東南に一年かかる所に「日の出る所」に近い所がある、という記録を三国志に残したわけです。ということですからこの四千里は一万二千里の中ではなくて外です。

第二問に対する答え

親魏倭王の国に入るわけですが、親吳倭王の国じゃあないわけですが。銅鐸圏は親吳倭王の国です。だからここで倭国として扱っているのは、あくまで魏に味方した連中の国を三十国挙げている。だから壹与の時に生口三十人が行った、その連中の国です。日本列島にある国を順に書いていったわけでは無いです。

質問5 秦王国

隋書倭国伝に「また東して至る一支国、また至る竹斯国、また東して、至る秦王国」とありますが、この秦王国とは何でしょうか。

古田

隋書の本文には、中国の中で、秦王国というのがあちこちに出てきます。これはどうも天子の弟かなにかがいる所が秦王国と呼ばれています。どうもそちらとの関わりでこちらの秦王国というのを言っているのじゃないか。つまり天子に対する弟のような。地理的位置は隋書を読む限りそんなに遠くへ行っている感じはないわけですが。九州の内部に中国と同じ秦王を名乗る国があったのではないかと思います。(文責者注＝古代は輝いていたⅢ 179頁以下に詳しい)。

質問6 倭国の範囲

三十国の読み方で美濃とか尾張が出てきますが、先生の「古代は輝いていたⅡ」倭王武の上奏文のところで(237頁)毛人は瀬戸内海西半と書いておられます。卑弥呼の頃は九州から東海地方まで勢力があったのに、倭王武のころは、中国地方の半分まで後退したと理解するべきでしょうか。

古田

倭王武の上表文は五世紀の問題であり、卑弥呼は三世紀の問題です。

「古代は輝いていた」でも倭王武と関東との交渉は第三巻で述べると書いてあります。

質問7 銅鐸について

私は、近畿銅鐸圏をはじめとする、銅鐸というものを使っていた民族は天孫族とは異質の先住民と考えてきたのですが、先生のお話は天孫族が使っていた神器として銅鐸があったという風におっしゃったように思います。しかし客観的には、銅鐸が消滅する時期と巨大古墳が出現する時期がほぼ一致していると私は考えているのですが。

古田

古事記の中で小銅鐸が国生みの重要な題材と言いますか、主役になっています。日本書紀は初めから矛になっているのに対して、古事記の方は小銅鐸として出現します。だから小銅鐸の方が古いわけですが。それを九州王朝が矛の国生み神話に書き換えているわけですが。そういうテーマがまずあります。

一方、出雲は銅鐸の伝統を受け継いで、前からその伝統の上に立っていた。それが近畿銅鐸圏に伝わった。狗奴国(拘奴国)の縄張りです。その地域を神武東侵で九州王朝側

が滅ぼしたわけです。その滅ぼされた方の銅鐸が、いわゆる巨大銅鐸になってくると、古事記日本書紀から、まったく姿を見せなくなるわけです。ということは征服された方の宝器であるということです。

桜井市の被差別部落のあるところから銅鐸が次々出ています。銅鐸が突き壊されて出てきます。銅鐸が使われていた時代は、銅鐸は神聖な神様の現れた姿だと思います。それを突き崩すというのは使っていた人々を侮辱する作業であって、単に銅鐸を突き崩したら面白いから突き崩したというのではない。そういう面で考えれば、銅鐸の消滅という面と被差別部落の存在というものが深い関わりがあります。

(以下 東京古田会ニュース130号10Pと同趣旨のため省略)

質問8 神武東侵と銅鐸

百問百答のなかに、神武天皇が東侵したのは紀元元年頃と書いておられます。但し、銅鐸の消滅の時期と絡み合わせるという趣旨のことも書いておられます。

出雲では銅鐸が消滅したのは紀元元年ぐらいで、九州で銅鐸がなくなるのは2世紀中ごろと思われます。近畿ではもっばらの学説では3世紀の中頃以降になくなったのではないかとされています。

この場合神武天皇の東侵と銅鐸の消滅との関係はどのように考えたらよろしいでしょうか。

古田

銅鐸の消滅は全国で一律に行われたわけではありません。

神武天皇の实在年代は解るかという問題で、今まで何回も出てきたわけですが、古事記日本書紀による限りは解らないわけです。何によって解るかという大和の場合、いわゆる弥生の中期末までは明らかに銅鐸があって製造もされています。ところが後期の初頭に、銅鐸が消えてしまう一方、銅鐸の破片などが出てきたりするわけです。つまり奈良県に関してはいわゆる考古学で言う弥生の中期末、末期初頭で銅鐸がなくなるわけです。それは神武の侵入と関わりがあるのではないかと考えると神武の年代がそこで推定されてきます。

弥生の中期末というのは従来の編年ではAD1000年ぐらいで、神武はAD1000年ぐらいとなるところなんです。それが最近1000年ぐらい遡るのじゃないかと言われてるわけです。そうすると弥生の中期末、つまり神武東侵は紀元元年の近くに行くのじゃないかというように考えています。

質問8の関連質問 銅鐸の消滅

歴博の発表は遡るにしても銅鐸の消滅は3世紀中頃ではないかと言っております。2世紀頃までは近畿地方でまだ銅鐸を作っております。一方大型古墳が出現するのは早く見る人でも3世紀中頃です。

古田

歴博は、神武は架空なんですから、神武が何年だとは全く言っておりません。古墳時代が75年遡る。従来考古学編年では古墳は300年頃と言われていました。今は、例の

箸墓が75年遡るということを盛んに言っています。それがもしその通りであれば箸墓だけが遡るわけではないから、いわゆる弥生中期末も75年ぐらい遡ると考えなければならない。そうすると元年に近づくと言うことです。

質問9 めで

(1) 垂仁天皇の王子に鐸石別命(めでしわけのみこと)という王子がいて、鐸という字を使っていますが、銅鐸との何らかの関連を考えた方が良いでしょうか。

(2) 鐸石別命のお母さんが丹波出身と言うことになっていますが丹波と銅鐸の関わりについてどうお考えでしょうか。(注 岩波古事記187頁)

古田

この「めで」の件も当然あります。それだけではなくて、銅鐸を意味する、「ヌ」が含まれている王子や王女は沢山いるわけです。それらは銅鐸に関わりのある名前として、もう一回考え直す必要があるのではないかと私は思っています。また丹波ですから、当然銅鐸と関わりがあるわけです。

ついでに一つ申しますと、わりと分かり切ったことが問題にされずに済んでいることがあるということです。それは、いわゆる邪馬台国の近畿説は成り立たない。なぜとなれば邪馬台国が近畿にあったら、魏の使いが大和に入るには銅鐸圏を通って行かなければならない。中国の使いが銅鐸を知らないことはあり得ないわけですから、当然倭人伝に銅鐸の話が出なければならぬ。それが無いということは大和に邪馬台国はなかったという、明確な証明になるわけです。これも分かり切ったことを専門家がそろって無視している例です。

もう一つ、最近気がついた単純な話を申し上げますと、二倍年暦の問題です。古事記は二倍年暦でできていますが、継体の所は一倍年暦になっている。日本書紀では二倍の年齢になっています。古事記は武烈以前の所は二倍年暦です。次に日本書紀のほうは、最近1.5倍年暦というものを思いつきました。なぜかという日本書紀の題材になっているのは、年齢がえらく長くなっている、明らかに二倍年暦です。日本書紀はそれを2分の1で扱っていない。つまり、二倍年暦の認識がないために、日本書紀を作る方は、二倍年暦の資料が残っているのをそのまま一倍年暦として再使用しているわけです。それを仮に、1.5倍年暦という名前を付けたわけです。そうしますと、現在の天皇家は勿論一倍年暦です。一倍年暦はいつから始まったかという古事記では継体以後です。今の天皇家は二倍年暦を二倍年暦として知らない王朝です。ところが残された古事記や日本書紀は二倍年暦や1.5倍年暦の姿を示しているわけです。これは王朝が違うということです。

暦は単なる日めくり計算ではなく、王朝の基本的な問題です。だから今のような事実、現在の天皇家は一倍年暦であることは分かり切っています。古事記が二倍年暦であることも分かり切っています。日本書紀が私のいう1.5倍年暦だということも分かり切っている。当然だからそこで別のものになっているわけです。この点からも万世一系などというのはおかしいのです。

ついでですが、日本歴史は世界人類の歴史のサンプルです。同じ問題はたとえばバイブルにもあるわけです。つまりバイブルは最初の方は千才ぐらいで来ます。ところが7,

8頁まで行って途中で五百才に落ちます。それからしばらくして一倍年暦に変わります。当然あれは王朝が違うという証拠です。

あれを全部ひっくり返してエホバの神とかを中心にする歴史ということは無茶もいいところですよ。分かり切っているから誰も言わない。特にヨーロッパ世界では言わないことになっているわけです。最初のエホバの神から後ずっと続いているように言っているのは嘘です。日本の場合の嘘はサンプルで、世界はさらに大きなスケールで展開しているわけです。

質問10 天孫族と銅鐸

銅鐸の関係で、伊邪那岐、伊邪那美が銅鐸を使ったということになりますと、天孫族は銅鐸を使ったというように解釈してよろしいのでしょうか。九州王朝は天孫族ということですから、女王国に銅鐸がないということと、どういう関係になりますか。あるいは神武が天孫族ではなかったのかということになると、神武はいつまでの天孫族なのでしょう。真の天孫族は饒速日でしょうか。

古田

最後のポイントは従来から言われているテーマです。なぜかというと天の橋立のところの籠神社は「もといで」の神社といわれ、それは饒速日で、ここから大和に来たのだと言っています。さらに言えば、これは邇邇藝より饒速日の方が本流であると言っています。それはある意味で正しいわけです。邇邇藝よりは饒速日の方が、兄というか上から別れています。(文責者注 先代舊事本紀では饒速日尊は天照大神の子の天押穗耳〈おしほみみ〉尊と、高皇産靈〈たかむすび〉尊の女の栲幡千千姫〈たくはたちぢひめ〉命との間に生まれた子とされる。また古事記では天忍穗耳命の長男が天火明命〈古事記では=饒速日とは書いていないが〉で、邇邇藝を次男としている。岩波127頁)

これを本当とか嘘とか言うような分け方はおかしいです。分流の分流は分流ツーで、分流スリーもあるとすると、神武の方は分流ツーで饒速日の方は分流ワンである、という可能性は十分あるわけです。その饒速日が大和に入ってきて大和に饒速日の伝承をいろいろと残しています。

ですからアマテラスの海上からの侵入者の分派が一つだけではなくて分流がいくつもあって、神武たちの分流ツー以外にも分流ワンが既に大和に入っていた、という可能性は十分あり得るわけです。

出雲の小銅鐸の系譜を発展させたのが近畿のいわゆる銅鐸圏で、これが巨大銅鐸になって行くわけです。それが狗奴国(拘奴国)だと思っています。その、中期、後期銅鐸の狗奴国(拘奴国)が減ばされます。

ということで小銅鐸の系譜、詳しく言いますと国生み神話で古いのは小銅鐸神話です。アマノヌボコではなくアマノヌオトと読むべきです。ヌオトのヌは小銅鐸です。ですから小銅鐸国生み神話があつて、これを国生み神話Aとします。それで国生み神話Bが日本書紀です。これはアマノヌボコで矛になっています。ここで国生み神話の作り替えが行われている。最初の国生み神話は小銅鐸をめぐる国生み神話、ところがこれを、アマノヌボコと一矛は楽器ではなく武器ですー武器で行う征服神話に変えられているわけです。繰り返しますと小銅鐸は武器ではなく楽器です。権力のシンボルではありますが、

これは韓国にも中国にも元があるわけです。権力者が来たことを知らせるような、武器ではなく楽器なわけです。その楽器を元にした国生み神話が国生み神話Aです。ところがそれを、矛という武器をもとにした国生み神話に作り替えたのが日本書紀です。

問題は古事記の注を日本書紀の立場で付けている、付け直しているわけです。誰が付けたかという、はっきりしています。古事記ですから太安万侶が付けているわけです。それは日本書紀の上で付けている。弟（オト）の所を矛に直して注を付けているわけです。それを宣長がごっちゃにしたから話が混線してきたわけです。太安万侶の目の前に既に古事記があったわけです。それに彼は注を付けたわけです。

元に戻りますと国生み神話に二種類あります。楽器国生み神話と武器国生み神話です。九州王朝は武器国生み神話です。海人族が武力で筑紫、稲作の地帯を征服しました。天照大神は楽器で征服したのではありません。天照大神の征服譚は矛に関わるものです。一方出雲の小銅鐸の方を伝承したのが拘奴国です。拘奴国の奴の意味ですが、後漢書の場合は奴の意味が違っているのではないかと、奴が銅鐸になっているのではないかと、思っています。とにかく事実として近畿がいわゆる出雲の小銅鐸を受けて、それを中期銅鐸、巨大銅鐸を発展させたことは間違いのないわけです。それが九州の矛の、支配王朝を作った九州王朝の分派に滅ぼされるわけです。滅ぼされたことに関連して、そこでも被差別部落が出てくるわけです。拡大して行ったわけです。神武が東侵したところですのでその問題は出ています。(第一陣)。第二陣が今度は、周辺の近畿の銅鐸圏を滅ぼすという段階で被差別部落が拡大再生産されて、その中で天皇陵が巨大化して行くというふうに私は理解しています。

これはあらずじですからこれからまた精密に、今言ったのは中銅鐸とか大銅鐸とか巨大銅鐸とか言う形だけで言っていますが、デザインがいろいろあるわけですから。デザインは間違いなく一つの文明の表示、サインなわけです。

それはアメリカのメガスさんも、土器のデザインなどを精密に調べています。実に精密な土器の分析です。同じように銅鐸についても、佐原真さんがやったのは有名ですが、まだまだあれが初期段階です。銅鐸のデザインで、何らかのサインがありますが、それ一つとっても、ここは一本だ、ここは二重だ、だからこう違っているというそういう精密きわまりない分析を銅鐸に対してやる研究者が是非出て来て欲しい。残念ながら文字がないですから、デザインで勝負するしか仕方がないですね。やったら必ず成果が出ると思います。私が言ったのはその成果が出る前のアウトラインです。

質問10の関連質問1 小銅鐸

伊邪那岐、伊邪那美と邇邇藝はその小銅鐸につながるのでしょうか。また大穴牟遲神は、神話上は伊邪那岐、伊邪那美の系列に入らないように思いますが。

古田

さっき言った天照大神の海人族の稲作支配、いわゆる天孫降臨という名の支配、それが邇邇藝ですから、これとさっき言った楽器である銅鐸、小銅鐸とは別です。だから邇邇藝の方は矛の方で、大穴牟遲神の方は小銅鐸の方です。少彦名命はどちらかというと、須玖岡本ですから、須玖岡本の近所から小銅鐸が出ていますから、これは小銅鐸の仲間と見ることは不可能ではないと思います。しかし場所が博多湾岸ですから、矛の国でも

あり、おおざっぱに言えば少彦名命は出雲との仲介役のようなそういう位置にあるのではないかと思います。

大穴牟遲神の方は出雲です。小銅鐸で矛ではないわけです。出雲から出てきた筑紫矛と言っているのは筑紫のスタイルの矛だからで、出雲から出てきても筑紫矛と言っているわけです。筑紫と関わりがあることは間違いありません。しかし出雲が筑紫矛を主体とする世界ではないわけです。

ついでながらその場合出雲から出てきた銅劍といわれているものはあれは銅矛であって、柄がついた形の銅矛です。

質問10の関連質問2 九州の銅鐸

北九州から銅鐸の小さいものがかかなり出でています。これはもともと北九州産なのか出雲産なのか解りませんが、銅鐸のふるさとが九州だということを書いている人がいます。その人は、纏向は九州の香りがいっぱいすると書いてあります。前方後円墳を作ったときに使ったのに違いないが、非常に九州の香りがする、と書いています。

古田

銅鐸が九州原産と言うのなら間違いです。銅鐸は中国原産です。それが韓国に出てくるわけです。それで九州でも出てくる。須玖岡本の近辺でも出てくるわけです。九州原産というのは中国や韓国を経由しての議論です。あくまで中国に原産で韓国にそれが伝播して韓国から北部九州に伝播した。そこから日本列島、出雲とかに伝播してきている。

質問11 倭国と日本国

旧唐書には倭国と日本国が二つ書かれております。倭国の最終の貢献が648年、日本国の最初の貢献が703年ですが、倭国は九州島とその周辺、日本国は中部地方から西のエリアと考えてよいでしょうか。

古田

倭国と日本国が同時間帯に、ここからここまで倭国、ここからここまで日本国というように日本列島は別れていたわけではありません。つまり701年までは東北地方など別にして全部倭国でした。それが701以後全部日本国に変わった訳です。

それは勿論唐が背後にいたわけですが、時間的に、倭国時代から日本国時代へと変化している。その変化した時点が701年です。その701以前が評の時代で、評の原点は筑紫の都督府です。都督という名の下に評督がありました。それは太宰府を中心として関東まで及んでいた。関東の那須国造碑の中に出てくるあの、従来天武と思われていた天皇名が出てきます。それと唐の年号が出てきます。あれは今日のお話でも天武ではなくて、九州王朝の天皇名です。白村江以後天子を天皇といっていますから。それが那須国造碑にそのバックになっている則天武后の唐の年号と共に九州王朝の天子の名前がでているのです。

それを天武天皇を介在して理解していたのは間違いです。天武天皇は九州王朝の真人の身分であったわけです。

質問 1 1 の関連質問 倭国は九州か

旧唐書では倭国は大海の中にあると書いてあります。これは九州島だと理解できませんか。大海の中にあるというのは東西南北みな海という意味で、日本国の場合は西と南は海であるが北と東は山と書いてあります。これは倭国のエリアと日本国のエリアが違うという意味ではないでしょうか。

古田

倭国を九州だけというのは、客観的にはできないと思います。日本国と倭国は地理的に、ここから東が日本国、ここから西が倭国というものではありません。日本海も太平洋も大海です。九州の周りだけが大海で、近畿の周りは日本海は大海ではないとかいう意味ではありません。中国から見ると日本海から太平洋につながる全体が大海です。それから東は山をもって限りがあるというのは（注 東界北界有大山爲限）、今の中部地方の信州のことで、日本列島の中の、これは明らかに山です。それをもって一つの限りをなして、その後にもまだ国があると、こう言っているわけです。それは関東以東の地域を当てて言っている。中部地方までは倭国で、そこから向こうが日本国だという話ではない。東界北界有大山爲限は倭国の話であり、倭国の地理的状况を書いてあるのであって、日本国については言っていない。その倭国を日本国が、分派で遺産相続をした、というように私は理解している。

質問 1 2 人麻呂の歌

先生が挙げられた人麻呂の二首、一つは 1 7 9 8 番の

古き家に妹と我が見しぬばたまの黒牛瀉を見ればさぶしも
と、もう一つは 1 2 4 7 番の

大穴道少御神のつくらしし妹背の山を見らく良しも
については両方とも通説では紀州のこととされているようですが。

古田

1 2 4 7 番は、大穴道と少御神がお作りになった山が妹背の山だと言っているわけですが、大汝、少彦名ですから、当然出雲の神話の話です。古事記には、大汝と少彦名が出てくるんですが、二人が作った山というのは出てこない。腰掛けて見渡したところはあるのですが。ですから独自の伝承が出雲・石見にあったのでしょう。それを人麻呂は歌った。人麻呂歌集に入っています。ですからこれは若いときの人麻呂が石見にいて作った歌だと考えて良いと思われる。石見の方の歌がずいぶん入っています。

それともう一つ言えることは、元々彼の家の出身は大和です。これは実は福岡県の大野町という所で柿本さんという方が系図をもっておられて、柿本人麻呂の子孫だと称しています。その中に大和から来たと書いてある。

もう一つその系図で面白いのは人麻呂の息子の名前が繰り返して出てくる。息子の名前がどれだけ出てくるかというと、8 世紀に東大寺の大仏を作ります。あの時息子が鍛冶師、金属の加工の技術者で、それで九州福岡県から呼ばれて東大寺の仏像作りに参加している。その息子は九州にいて小郡市近辺にいて、それで東大寺に呼ばれて行った。その名前は何回か出ています。

それはそれとして、九州へ来る前大和から来たと書いてある。これを私は本当だろうと思う。なぜそう思うかと言うと、人麻呂の歌の中で大和で恋人を失ったという、有名な長歌があります。妻を失って血の涙を流したという。前書きのついた207番の歌です。自分の妻を亡くした。辻に立って妻の姿を見ることはできないという若い人麻呂の感情というか、血のにじむような情があふれた歌が万葉集巻二の終わりの方に出ているわけです。これについても恋人が九州や島根にいてそれを連れて大和に行ったとは思えない。その時代若い青年が奥さんを連れて旅行するなんてできないでしょう。それは高い身分の人は別ですが、若いときのことですから身分は低いわけでしょう。それが奥さんを連れて九州なり島根から大和に行ったとはとても考えられない。そうすると奥さんはやっぱり大和の奥さん。歌の中でも大和の人だと言うことが先頭で歌われている。大和出身の恋人を人麻呂は大和で失っているわけです。それに関連する歌が1798番の歌です。(以下131号19頁と同趣旨のため省略)

もう一つ裏付けとして、島根県には柿本という地名がありません。太宰府やあっちの方にもない。ところが大和にはご存じのように柿本という地名があります。柿本寺というのがあります。この間行ってきました。シホンジと音で言っていますが、これは柿本という地名があつて、そこにお寺があつたから柿本寺と言っています。そこはまた、人麻呂に関する伝承をもっています。ですから柿本家の出は大和の柿本と考えて良いと思います。

それが、人麻呂の親御さんが、どういう事情か知りませんが石見に行ってそこで土地の娘と結婚したか恋人になったのか、それで生まれたのが人麻呂です。親父は大和へ帰ったか、そのことは解りません。親父さんの名前が今のところ残っているところはない。しかし全国に120近く柿本神社があるのですから、逐一調べて行ったら出てくると思います。

私がビックリしたのは、石見の浜田市戸田の人麻呂が都に呼ばれて行ったというあの都は、すぐ目と鼻の先の豊浦の都であったということです。今の人麻呂神社の残り方から見ると私は人麻呂神社にとって山口県が主要な場所であったということはおそらく間違いないだろうと考えています。

質問に戻って、妹背の山が和歌山というのは誰かの解釈、学者の解釈です。問題は次女や少名彦名が和歌山まで来たという話はないわけです。これは出雲の話です。彼が出雲で過ごしたという話に結びつくわけです。それを知らないから和歌山にするわけです。妹背というのはあちこちにありますが、和歌山の妹背にその人が無理矢理結びつけただけなのです。

質問12の関連質問 九州、紀州、出雲の関係

三輪山伝説について九州の三輪町に少名彦名の神を祭る社があり、これは出雲から九州に伝わっていると思います。紀州の方はそこからの伝播ではないでしょうか。

古田

紀州については、いくら有名な学者が書いていてもアウトです。

九州の場合はおっしゃるとおりで、九州は出雲の支配を天孫降臨という名の征服で横取りしたわけです。第一少名彦名というのは九州の神様です。須玖岡本と言うように、須

玖のスクナです。固有名詞はスクです。スクナヒコナはどこかと言うと博多湾岸の人物です。大汝の方は出雲です。ですから九州にスクナヒコナを祭る伝承があるというのはおっしゃる通りです。

もう一つ言えば大国主命よりもっと前から出雲との関わりを九州は持っているわけで、吉野ヶ里の所に日吉神社があって、そこに大山咋（オオヤマクイ）の神を祭っている。大山咋のオオヤマは鳥取県の大山です。

松本郁子さんが書いてあるオロチ語ではアイヌ人のことをクイ族といいます。クイというのは日本列島ざっとみて東北から九州までいっぱいクイがあるわけです。羽咋とか上九一色のクイ。福井のクイ、神武天皇の皇后の父（の父）は三島溝咋（みしまのみぞくい）といたしました。

九州にもクイがあります。日本列島中クイがいっぱいあって、日本列島を貫いているのです。クイというのは称号であると思います。ところが天皇家はクイという称号を作ったことはない。九州王朝も作ったことはない。もっと古いものです。そのオオヤマクイがあるわけです。これは大国主神や少名彦名のような弥生時代のような遅い時代のものではないのです。やはり縄文からクイという称号が南下してきたのでしょう。そういうことで吉野ヶ里もオオヤマクイを祭っているということになるわけです。ですから今おっしゃった九州の大穴牟遲、少名彦名が、出雲の関係であろうというのはその通りです。ところが妹背山のほうは妹山、脊山というのがあることにヒントを得て学者がそういうことを書いているだけです。

質問 1 3 天武は天皇でなかった話

大海人皇子、天武天皇は天皇でなかったというお話しをお聞きしました。これに関連して日本書紀には大皇帝と書いていますがその意味はどのように解釈するのでしょうか。天智天皇は大和王朝の天皇とすれば大海人皇子は天智を乗っ取ったという感じになるのでしょうか。

古田

結論の方から言いますと、要するに九州王朝は701年まで、九州王朝だった。近畿天皇家の時代ではないのです。近畿天皇家は地方豪族です。大皇帝というのは8世紀に作った言葉で、日本書紀は8世紀に作った本です。8世紀の近畿天皇家は天智や天武を権威にして作っているわけです。自分たちが正しいと言うことを天智や天武を権威にすることによって正当化しようとした本です。それが、本に大皇帝と書いてあるから大皇帝であろうという考えは駄目です。

一方実際の天武というのは真人です。名前が真人です。九州王朝の天子、それが天皇という名前に変えられていますが、そこから任命されたナンバーワンクラスの家来です。天武は家来なのです。家来でもなぜナンバーワンクラスの真人になれたかと言うと、奥さんが宗像からまいりましたから、そういう九州王朝との関わりはあった。それで真人になれた。しかし第一権力者ではなかったのです。

日本書紀は天智を中心に据えています。大化の改新も天智がしたことになっているわけです。8世紀の自分たちの統治が正当であるとするための、コマーシャル用語なわけです。コマーシャル用語がこうあるから事実もそうなのだという考え方はぬぐい去るべき

です。

質問14 仲哀天皇、神功皇后の実体

豊浦の宮に「あまのしたしろしめすすめらみこと」というのが日本書紀に出てきます。近畿天皇として一人いて、名は「たらしなかつひこ」諡は仲哀天皇ですが、出てきたのは近江のほうからですが、研究してみると内容が解らない。(注「知天下」は古事記では大国主命のところ、日本書紀では仲哀天皇のところだけである)

それから奥さんの神功皇后は「おきながたらしひめ」で、角鹿の方からわざわざやってきて一緒に暮らす、というのですが何をやったのかさっぱり解らない。その前の景行天皇もヤマトタケルと九州征伐を除けば何をやったのかさっぱり解らない。そうすると、神功皇后もひと皮むけば、三韓征伐に行っただけと言いますが、どうもよくわからない。そうすると景行、仲哀、神功あたりが、応神を正当化するための手段としてそこに作られたような、実はなかった天皇ではないか、という感じがしています。豊浦の宮にいたということは九州王朝の天皇のことを取って、仲哀天皇の記事にしたのではないのでしょうか。

古田

「いた、いなかった」の議論で用心しなければならないのは、これをいなかったとしたら、それ以外はいたとしてかかるのかという問題が出てくるわけです。何をもっていたと考え、何をもっていなかったと考えるかという起因をしっかりとしていないと簡単にはそれは言えない。疑う方が勝ちでは困るわけです。これは一般論です。

今の件は確かにおっしゃるように、仲哀と神功が豊浦の宮で天の下しろしめす仲哀がいたと書いています。おかしいと言えばおかしいのですが天の下しろしめすの意味が問題です。

天の下しろしめすを我々は8世紀以後の用法で天下を統一・支配したという意味に慣らされているわけです。しかし実際は天の下しろしめすはそう言う意味じゃあなくて、アマ国（九州王朝）が、アマ国のもとにある、ある分国を支配したという意味なんです。そういう本来の意味で考えれば、別に天の下しろしめすということはどういうこともなく、あちこちに天の下しろしめした連中がいていいわけです。

ということで、仲哀が豊浦で、全体から言えば九州へ行く経過地に過ぎないのですが、かなりの期間、もしいたとすれば、そこで天の下しろしめしたと言って言えないことはないわけです。そういうレベルです。

それでは仲哀や神功皇后が架空か実在かということになると、これも古事記と日本書紀ではだいぶ違うわけです。要するに仲哀は九州の勢力と戦ってその矢で射殺されて死んだとなっている。そういう点では知らないものを勝手に作って勝手に死んだことにした、と言えないこともないけれど、一寸苦しい。それならその論証が要るのではないか。特に仲哀が死んだ後神功が武内宿禰と一緒に近江へ攻めて行きます。あの時神功は仲哀のお妾さんです。本妻さんは近江にいるわけです。その若いお妾さんを連れて仲哀が出かけて九州で死んだわけですから。そのお妾さんが武内宿禰のバックアップをえて本妻さんの近江への襲撃を図るわけです。それで倒したと言っています。それは一つの非常に具体的な話です。具体的だから本当だとは言えませんが、それを架空の話だと、

もし言いたいならその証拠を挙げる必要があるのではないかと思います。

もう一つは、神功は出身地が解っているわけです。今の滋賀県米原の近くに神功皇后の墓（円墳）があります。小さくもないがそんなに大きくもない。中型の格好の良い円墳があり、ここで神功皇后は生まれたという伝承になっている。だから私は、神功皇后はそういう意味では、はっきりしているとまでは言えませんが、一つの土地勘に基づいているわけです。大和に作っている神功皇后のでかい墓、あれは後で作ったもので、何のために作ったかはまた別の問題ですが。

そういう面で元に戻りますと今の日本書紀では豊浦というのはまず、仲哀、神功に関係して出てくるわけです。それからもう一つは白雉が、豊浦ででたという話があります。そこで白雉という年号になった。つまり代々祥瑞であるという形で出てくる。この方は九州王朝の資料からはめ込んでいるわけです。（注 広辞苑によれば白雉元年＝大化五年 650. 2. 15～665. 4. 10? 孝徳天皇の時としている。二中歴では652年。なお、白雉は穴戸から献上されたとあり、豊浦とは出てこない。）

この項は九州王朝の資料をはめ込んである。白雉ですから孝徳天皇の時代にはめ込んだわけです。ということで九州王朝の都が豊浦にあった、白雉という九州年号が作られた、それに関わりある話ではなかと私は理解しています。

そこへたまたま人麻呂の問題が出てきて、その豊浦が都と考えれば都へ行ったという話が理解できる。山口県に人麻呂神社が集中していることも理解できるというわけです。

（以下、九州王朝の都について東京古田会ニュース131号19頁と同趣旨であるため省略）

質問15 貶められる前王朝

前王朝が信奉していた神話系列を自分たちが新しい王朝の神話系列でおとしめる、日本はサンプルであって、これは世界的であると言うお話は全くその通りだと思います。フランスの王様がギリシャ神話を利用して自分の政治的な意図を表現しています。しかも石の彫刻をつかって、ベルサイユ宮殿の中にもそれを表している所があります。

古田

それに関連してギリシャ神話には面白い問題があります。それは私の長年持っているテーマなんです。それは何かというと神話にはその背景に歴史事実があるという立場です。そういう意味でギリシャ神話を見たときにはその背景に面白いいろいろな歴史事実が背景にあるのではないかと考えます。

たとえば、あっと思ったのはギリシャ神話で神様がオリンポスの山に集まるのですが、あれがギリシャの北にある。あれはおかしいのです。神様が集まるのなら、たとえばエジプトとかクレタ島などの神様が集まるのだから、ギリシャ半島の南端ぐらいの所に集まれば良いのにギリシャの北端のオリンポスに集まるということがどうもよくわからなかった。

ところがギリシャ神話を読んでいるうちにあっと思ったのは、太陽の神アポロが車に乗って夕方にはオリンポスに行く。太陽の神です。太陽が、アテネから北西に向かうというのはおかしいわけです。太陽は東から西に行くのが決まっているわけです。ところが地図を見てトロヤとオリンポスが一直線上です。つまりトロヤの真西がオリンポスです。

ということはトロヤの太陽はオリンポスだということです。あの神話の原型はトロヤ神話ということです。アテネ神話ではなく、地理的關係もトロヤ神話です。それをギリシャ神話に取り込んで使っている。

ギリシャがトロヤを征服し、トロヤ神話も盗んでギリシャ神話の骨格にしたのではないかとてつもない一つの疑問を持ったわけです。さらにいいますとギリシャ神話にいろいろの神が出てきます。一生地球を背負ったり、奴隷的工作を押しつけられた神様もいます。しかし初めからそのような神様がいることはない。そういう奴隷的な役割を押しつけられたからなのです。本来はある民族の輝ける中心の神様だった。つまり各部族の神様がそれぞれ配置されて、ストーリーにされていますから、輝かしい位置や中ぐらいの位置や一番下の位置に、そういうところにはめ込まれて作られているのではないかと。元に戻すとギリシャ以前の本来の神が姿を現す。元々民族の代表的な神だろうと思われまます。トロヤ神話を盗んでギリシャ神話にしたのではないかとされます。

もう一つトロヤの東にいくと山岳民族のクルドがいます。あれはクルドから出てきた東洋ではないか。つまりクルド神話にも深い関わりがあるのではないかと。そうするとクルドが神聖な太陽の出る所だと想像するのです。ということでギリシャ神話を手がかりにその原型、元を探ることができるのです。

それから、前から私はもう一つ問題を持ってまして、ギリシャの北の端にオリンポスがあるということは、そのオリンポスの北を含んだ神話もあったのではないかと。つまりルーマニア、ブルガリヤなども輝ける神話圏であろう。ルーマニアやブルガリアなどの北海沿岸がトロヤ戦争より前の輝ける文明圏ではなかったかなと、はじめてトロヤに行ったときに、ロシア、ポーランドを回って、そういうイメージを持ってイスタンブールの空港に着いたわけです。その通りだったわけです。

博物館を回ってみると、あのブルガリア、ルーマニアなど黄金文明が燦然と存在していました。それはトロヤ戦争より前です。黄金だけがあって神がないということは無い。当然神々がいたわけです。

その神々を加えるとオリンポスはその真ん中、大体真ん中にあつたのでしょうか。今のような北の端ではなかった。その中心がトロヤ神話になったのではないかと。これも歴史の頭の想像ですが、これを進めるにはルーマニア、ブルガリアなど調べる必要がある。ギリシャ神話は西欧の人はお話として馬鹿にしている。イリアッド・オデッセでさえ「お話し」にしていた。ましてやギリシャ神話はお話しのお話しで、あるべき事実などみていない。根本はユダヤのゼウスの神になっているのです。

質問 16 南米に残っている日本語

南米に残っている日本語についてお話しください。

古田

まずチチカカ湖が非常に面白いポイントです。2007年2月に南米へ行ったとき、話していましたが、もしかしたらチチカカは日本語かも知れないということでした。理論仕立ては勿論その前にあって、アメリカには地名は沢山ついている。アメリカでは大部分は英語だが、部分的に英語ではない地名がある。ナイアガラは現地語で英語ではありません。あれは現地民の言語だと考えて良いだろう。

南米も同じで、大体スペイン語です。その中でスペイン語やポルトガル語でない地名がある。それは現地民の言語である。現地人の中に日本人が縄文時代に行っていたら日本語である可能性があるわけです。というのが基本的な論理的な私の判断です。

その上にたつたたとえばチチカカ湖というのは、お父さんお母さんという意味ではとてもあり得ない。

チは神様です。古い神様。秩父山脈もチのダブル言語です。カカは何回も出てきた川のカで神聖な水のダブル言語です。そうするとチチカカとは神様の与えたもうた神聖な水という意味になるわけです。行く前から良くそこまで言えるもんだと思いながら行った訳です。ところがそれが本当だったわけです。

最初、通訳の人に聞いたら、チチカカはインカ語で鉛の出る池、腐った池のような意味だと教えられました。ところが現実にチチカカ湖に行った藤沢氏が現地に通訳の方にお聞きしたところによりますと、アイマラ語—インカの一つ前の言葉で、インカは鎌倉室町みたいな感じですが、それより前の原住民の言語—では「太陽の神の与えたもうた水」という意味です。私が言った通りでした。

太陽の神様から頂いた水。アンデス山脈の西から見るとチチカカ湖から太陽が出るわけです。太陽から賜った神聖な水と言うのは本当にどんびしゃりです。ということは日本語なんです。

後でいろんな証拠が出てきました。たとえばマナビ州というのがあります。赤道直下にあります。これは勉強する州ではない。私が理解する古代日本語からすれば、マは真実の真、ナはオロチ語で大地、ビは太陽、美しき大地の太陽の州ということになる。それが赤道直下です。エクアドルというのはスペイン語で赤道です。中でも、まさに赤道がマナビ州です。日本語で美しき大地の太陽の州となるわけです。このへんにバルデビアがあります。日本人そっくりの顔をした人が出てくるところもそんなに遠くないわけです、

そのほか、次々と出てきますが時間の関係で省略しますが、日本人と同じ遺伝子をもった人が住んでいる場所に、日本語で解ける地名がついている。現代人の遺伝子をとっても、また1000年以上前のミイラの遺伝子をとっても日本人と同じ遺伝子です。そこで日本語でうまく解ける地名がついている。これは日本語と見るのが当たり前で、スペイン語だとか他の言語だと言う方が無理なのです。

ということで予想以上に日本語地名が残っているという問題にぶつかってきました。

その総仕上げがチチカカ湖でした。

感動的な話をもう一つしてみるとバルデビアの近所に行ったときに大歓迎を受けました。市長さんの演説に特に感動したわけです。市長さんは、「我々は歴史を語る事ができませんでした。歴史を語らずに未来を開くことはできません」と言うのです。

結局何を言っているかという我々は日本人の子孫がここに来たのだと言うことを知っているのだけれど、それを語ることはスペイン人に禁止されてきました。ところが今回それが話せるようになった。丁度左翼の大統領が選出されました。我々が行く一ヶ月前に、まさかと思った少数派の民族の連合体の大統領が当選したわけです。

それで少数民族の発言ができるようになりました。それまでは顔を見ると日本人そっくりの人が一杯いるわけです。だから彼らは先祖は日本人だと、内緒に家庭では言っているわけです。しかし公にはそれを言うてはいけないわけです。スペイン人は自分たちよ

り前に日本人が来ていると言うと面白くないわけです。私どもが十何年前に行った時は、そういうことは言うてはいけないことになっていると博物館の館長に言われました。ところが大統領が代わってそれが言うていい時代になった。

それから一ヶ月後だった。市長さんが、「我々は歴史を語るができるようになりました。未来も語るができます」と名演説をしてくださったわけです。

ということで現地の人は顔を見れば解るのです。日本人の顔をしているのですからね。そのとき七八割は日本人の顔をしていたし、バルデビアの村に行ったら日本人そっくりの村があるという話も聞きました。テレビで日本人が出たりすると同じ顔だと現地の人も思っているわけです。家庭ではみんな日本人の先祖だと言っているのです。しかし公の場所では言うてはいけなかったわけです。それが言えるようになったという感動的な演説でした。

質問 17 天孫降臨の意味

「なかった」創刊号で（85頁）、天孫降臨は倭人同士の間で生じた事件であると結論づけられていますが、九州の縄文人が腰岳の黒曜石を半島に持ち込んでいることとの関係をご説明願いたいのですが。

古田

まず倭人伝に示されているように、倭人は九州にいて韓国にいなかったわけではない。当然海洋民族ですから、両側にいたわけです。三国志では朝鮮半島の南端は倭地であったわけです。これは山海経、中国の、日本の縄文時代にできた本に書いてあるわけです。北半分はピョンヤンを中心にした国であるが、その北は燕です。中国遼東半島の北は燕で南が倭地であると書いてあります。

海の間が倭地であるという書き方でなくて、今の北朝鮮のピョンヤンの南あたりから倭地と書いてあり、それは燕に属すると書いてあります。それを素直にとると朝鮮半島の南は倭地であると理解するより仕方がないわけです。ということですから倭地というのは九州側も南朝鮮側も倭地ということになります。

天孫降臨は、壱岐対馬の海洋民族が、彼らは船が得意で中国から来た金属器の武器をプラスして最強の軍事集団となり、それで今の稲作が栄えていた博多湾岸、板付など征服しようとした。これは倭国内部の事件です。もし仮にアマテラスたちが高句麗人だったら、高句麗語なんかで来るわけですが、そうすると日本書紀でも支配者は高句麗語になっていなくてはならない。正確には出雲王朝の頃は、倭はその一の家来だった。それが中国の金属器を手に入れることによって反乱を起こしてご主人の出雲王朝・大国主命などを追いつめて自分たちが権力を奪取したわけです。アマテラスの反乱という言葉は私は使っていない。反乱をして主権を奪取したわけで、倭人圏内部の事件です。

質問 17 の関連質問 1 朝鮮半島も九州も同じ倭人か

朝鮮半島と九州とは同じ倭人ではないと考えられないでしょうか。九州の縄文人が半島に行っているのだと思います。

古田

その場合山海経は間違いだということになりますが、そうではなく、両岸とも倭人です。九州も倭人の土地だし、韓国も倭人の土地です。

九州縄文人が半島に行くのに、同じ倭地だから、半島の縄文人が九州に来れないと言うことはないでしょう。同じ倭地を違う倭地に無理に仕立てるから話がおかしくなります。要するに海洋民族で海洋民族は両岸を自分たちの領域にするわけです。だから、今の対馬海流でしたら、北岸の今の韓国部分と、南岸の九州部分両方が、倭地なわけです。黒曜石もそれに流通しているわけです。

質問 17 の関連質問 2 東鯤人かどうか

たとえば九州の縄文人あるいは弥生人を東鯤人としますと、東鯤人が半島の南部にもいたことになりませんか。

古田

東鯤人として、というのは乱暴です。東鯤人は話が全然別だと思っています。実は私も初めは間違えて東鯤人は、東の端の人という意味ですので、それを倭人よりもっと東にあると考えました。それは近畿の銅鐸人ではないかと考えた時期もあります。ところがそれは間違いだったことが解りました。なぜかと言うと、いわゆる漢書にある倭人の記事は、燕の地の記事にある。そして今度は、東鯤人は呉・越のそちらの記事にあるわけです。だから原点が違うわけです。

東鯤人の方は呉越の、そこから見て東側の地域。九州の東岸部になるわけです。そこを東鯤人と彼らは呼んだわけです。一方倭人の方は燕地の方から九州の東岸部の人を倭人と呼んだ。要するに命名の発生源が別なわけです。だからそういうものを基本にして倭人と東鯤人がどういう関係であったかという問題に移るべきなのです。

私の今の理解では倭人伝の場合は九州両方を含んでいるわけです。7万戸といっているのは博多湾岸の倭人の世界です。投馬国（つまこく、薩摩のつま）言っているのは五万戸の世界です。同じ九州の中に北の方には七万戸の世界があり、南の方に五万戸の世界がある。どちらが古いかと言うと断然五万戸が古いわけです。なぜかと言うと縄文時代の南九州は、抜群の中心なわけです。

東に縄文あり西に縄文はないといわれ、東高西低といわれたのが、ひっくり返って、南九州からどんどん、沢山の縄文の遺跡が、点ではなく、面で出てきたわけです。北部九州など及びもつかぬ、これがいわゆる東鯤人です。

次に北部九州の女王国と投馬国との関係を考えるべきです。倭人伝で出ているところから見ると投馬国の方はまともな官職名になっている。つまり長官が弥弥、神のミでミミはダブル言語。そして今度は弥弥那利というのが副官になっている。全国にミミという地名は近畿などにもたくさんあります。そういう古い縄文時代からのミミという地名と対応して弥弥、弥弥那利という官職ができています。

ところが倭人の方は長官が伊支馬、壱岐対馬の占領軍がそのまま長官になって伊支馬になっている。一大率になり、周辺はそれを怖れていると、こうなってくるわけです。

質問 18 邪馬壹国は誰が言ったか

邪馬壹国というのは倭人がつけた名前なのではないでしょうか。先生は卑字と尊字を詳しく論じ

られています。

古田

用字の厳密性についてですが、それはいろんな立場があるわけですが、たとえば、大無量寿経というのを魏の僧侶が訳しています。これは親鸞なんかも使っている大無量寿経は三世紀の時代にできたものです。

そこではインドの言葉を非常にいい意味で、みなお弟子さんたちですから、いい字をあてているわけです。発音だけならいい意味も悪い意味も中間のものもあるわけです。その中でどれをあてるかという問題があります。その場合仏典の場合はいい字を取っています。

逆に悪い字を取っている例もあります。蛮族、中国に敵対したきょう匈奴とか鮮卑とかそういう蛮族を表すにはことさらいやらしい字を使っているグループがあるわけです。私は「倭人伝を徹底して読む」というではそういう例を逐一挙げております。(同書203頁等)

そのほか中間のものもある。たとえば邪馬台国の邪というのはよこしまという意味に取れば非常に悪い意味になる。ところがクエスチョンのはっきりしないという意味に取ると中間になるわけです。罵倒しているわけでもないし尊重しているわけでもない。中間になるわけです。まそういういろんなニュアンスがあるでしょうが、要するに発音が同じだけならいろんな意味に取れる。それを使用する側やそれを使う側の都合で選択している。有名な例では、たとえば高句麗という場合、新の王莽が高句麗などけしからんというわけで、高句驪(原文)という名前をかえて下句驪としたと言う話があります。(後漢書中華書局2814頁)。

ということで倭人伝の場合は中間のケースが多い。罵倒していやらしい字を、悪魔のような字を与えているわけではない。また仏典のような字をあてているわけでもない。ま、その中間の字をあてていることが多いということです。

質問19 都市牛利

都市さんの話ですが、今現在トイチと呼ばれる姓があるのでしょうか。ルビがふつてないと解らないのですがトシなのかトイチなのかという問題です。

古田

要するに問題は三国志の術語を中国側が書いたのか倭人側が書いたのかによって違って来るわけです。中国側が書いたとすれば中国側がああ字を三世紀にどのように読んでいたかがそのまま答えになります。ところが倭人側が書いたという立場に立った場合には中国側がどう読んでいたかという問題とはレベルが違って来るわけです。

中国側がどう読んでいたかもなかなか難しい問題です。三世紀の韻書というものがないですから。極く部分的に引用されたものが一部残っているぐらいで、全体としてはないわけですから基本的には判断できない。ましてや倭人側がそれをどう発音していたかは難しいけれど、幸いなことに今日私が示しましたように日本語の現在我々が使っているものと非常に近い共通性を持っている。そうすると逆にああ字をどういう発音で使ったかは、日本側から見て解るといって問題が今後出てくるわけです。言語学者もそういう研

究をする段階に来ていると思います。

日本側がどう読んでいたかという問題は、日本側が現在どう読んでいるかという問題と、無関係ではないから、関わりがあるわけですから、その点参考までに知っている方もあるかと思いますが、我々が現在使っている言葉の中にはかなり古い言語が残っていると思います。それで私がぶつかったのは一つの例を申し上げますと、鳥取県の大山です。あそこで一年に一回、確か7月あたりでしたか、神事があります。モヒトリ神事と言います。何をやるかという宮司さんが30人ぐらい連なって山へ上がって行って、山の湖の水を汲んで持って帰って、中腹にある神社で、神前に供えてお祭りをします。それをモヒトリ神事と言っています。この辺では水のことをヒと言うのですかと聞いて回りました。鳥取で聞いて回ったのですが誰もそんなことは言わないです。

一方火山についての中国新聞社から分厚い本が出ているわけですが、それで見てみますとあの大山が縄文時代には火を噴いていた。最初の四分の一ぐらいの時期はものすごく火が吹き荒れていた。中間の四分の二ぐらいの時期はちょろちょろ火になっていた。最後の四分の一ぐらいは消えてしまっています。消えるとすぐそこに水が溜まってそれが現在のような湖になっています。自然科学者の方がリアルに説明してくださっていました。

そうしますと、モヒトリのモは海の藻で、もやもやしていること。ヒはやはりファイア、トリはテイクで取る、だからもやもやの火を取ってくる神事と言うことになります。勿論吹き上げているときは取って来られません。もやもや火になったからと言って後は安心というわけにはいきません。また噴火することがあります。だから神様にそのような爆発がないように祈る神事がモヒトリ神事です。モヒトリという言葉はおおざっぱに言う縄文中期の言葉です。縄文の最初の時期では無理です。そういう言葉自身が意味を持たない。そして全部いわゆる火が消えて湖になって水を取る神事をモヒトリ神事と改めて言う必要はないわけです。そうすると今の縄文の中期以後となります。

私は言語の年代に釈迦力になっていた時代がありますが、そのときは本当に喜びました。つまり縄文中期にはファイアのことをヒと言っていた。海の藻のようなものをモと言っていた。トルという動詞があった。それだけのことですが、大発見だったのです。そこだけ偶然縄文の名詞や動詞が残り、後は残らなかったと言うことは考えにくいですから我々の生活用語の中にずいぶん残っていると思います。

質問20 高砂

最近高砂をあらためて見られて非常に感銘を受けられたとお聞きしましたが。

古田

高砂は代表的な能楽ですが、すぐお気づきだと思うのですが、藤沢さんの発見された東日流外三郡誌の中の記事で高砂族が杭州湾で天台山の、そこから安日彦長髓彦が来たという話、高砂族の話です。結婚式の時「高砂や」とやるのに何か関係あるのではないかと調べてみると大ありでした。

あの高砂やの能楽の内容は非常に不思議な内容です。要するにあれば九州の阿蘇神宮の神官である友成であるという、名乗りから始まります。彼が都、この場合の都は京都、へ行くわけです。途中で不思議な地名に出会います。大阪の住吉です。九州人の彼に取

って住吉とは博多湾岸です。それと同じものにぶつかる。それで今度は高砂にぶつかる。これも彼にとっては重要な地名であった。ということで今の兵庫、大阪で歌ったというスタイルになっている。出身は九州で目的地は京都。途中の兵庫、大阪で歌う。あちこちに足をかけている地名設定です。

次に、翁が住吉、媼が兵庫県高砂にいる。しかもそれが万里離れている。これがおかしいでわけです。大阪の住吉と兵庫県の高砂は万里も離れていません。車でゆけば三十分か一時間で行ける道です。それを万里離れていると言っている。それはここを題材にして語っているけれど、私が言いたい高砂と住吉は万里離れているところですよ、と言うわけです。

現代はいつかと言うと、延喜の御代だとしている。江戸とか室町ではない。能楽がある室町ではない、平安時代の延喜の御代が現在だという。延喜の御代かと思うと万葉集のその昔、平安時代から万代離れた昔の話という。それで何を言いたいかというと、自分が言いたいの九州の住吉とそこから万里離れた高砂の話を自分はしたいのだ。それで高砂の女性が住吉の翁に対して歌う。

高砂の夕は太郎の夕、カは神聖な水のカで、サは土佐、宇佐のサ、ゴは男子の敬称のコの濁音です。神のたもうた美しい水のでる海岸の土地、その男子よと媼が、女が言っている。

高砂というのは杭州湾。杭州湾と筑紫は万里離れている。帆を掛けてやってきたと書いてある。そういう地理的設定を語っている。それが、若い二人が添い遂げて、翁媼となった。めでたいやな、という話。結婚式でこれを歌うのはピッタリです。若いときから老年まで添い遂げる。お互い嫌いになったり離反したりせずに、添い遂げた。こうありたい、ということで結婚式に歌う。これは驚きました。

これに関連していっぱいあるのですが、興味あるところだけにしますが、高砂はそういう歌です。これを二、三頁でさっと歌い込んでいるのです。驚嘆しました。

被差別部落に純粋な日本語が残っている。純粋な日本の歴史が残っているわけです。我々みたいに論証に論証を重ねたものではない、また、明治以降天皇家賛美のために教科書に書かせた歴史でもないわけです。部落の中で伝えられた歴史です。それを彼はふんだんに使って謡曲を作っています。読んでみると、次々と出てきます。謡曲というものを私は今まで中世であまり関心ないと思っていましたが、あれは宝の蔵です。

被差別部落の河勝というのは、大和の初瀬川に籠にのせられたのを拾ったという、外人だとか言う話が色々されていますが、本質は被差別部落の中で伝えられた伝承をふんだんに使って観阿弥ないし世阿弥が謡曲を作っているわけです。

粗筋だけを申しましたが、そういうすばらしい宝が、まだ我々にはたくさん残されているということをもって終わりたいと思います。

終わりにエクアドルから、特別参加されプレゼンテーションもされた日暮さんには特別の謝意を表したい。

以上